

←旧本館と桜
(平成23年4月2日写す)

進修学習館前の樹齢は定かではないがかなりの老木・枝垂れ桜が今年も開花し、古色蒼然たる旧本館に華やかな彩りを添えています。百年余りの歳月を経てきたこの学び舎は、数週間前の激しい揺れで傷ついていながら、何事もなかったように平然とその威厳を保ち続けています。思えばこの建物は、大正期の関東大震災に見舞われました。当時の記録をみる限り、大した被害はなかったようですが、今回の大地震では……？

関東大震災時の土中

『進修』第23号（大正13年7月刊）の校報欄に次のような記事が残されていた。大正十二年九月の項に、
一日、始業式。正午頃大地震アリタリ、
三日、一日以来地震ノタメ不眠不休ノ状態ニテ多数ノモノ困憊ノ極ニアルヲ以テ慰勞 為臨時休業ス。
五日、職員ノ欠勤者多数ニテ成規ノ授業不能ニ付第四時限マテ授業ス、
六日、本日ノ授業第四時限マテ、
七日、同上。
八日、本日ノ授業第三時限迄。
この後、学校生活の異常を示す記述がないことから、授業は正常に戻ったものと思われる。そして
廿六日、罹災学校ヨリ転入学希望者二十名ニ対シ試験ヲ行フ。

とあり、関東大震災の大きな影響を伺うことができる。震災関係の記録はこれで途絶えている。

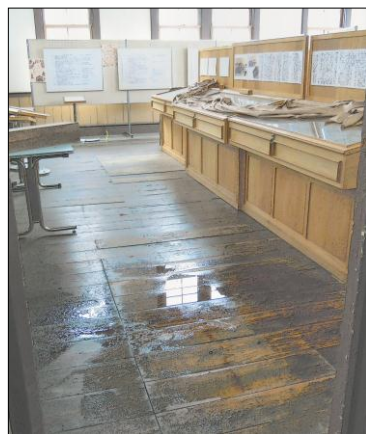
土浦地方にもかなりの災害をもたらした大地震であったが、生徒・教職員などに人的被害はなく、建ててから二十年近く経た校舎などについても、震災による被害記事が見当たらないことから、損傷などは殆ど無かったものと思われる。

ともあれ、関東大震災による混乱は、土浦中学校においては、一週間程で正常な学習環境を取り戻すことが出来、比較的軽微な影響で済んだ。

旧本館の被害は軽微か？

建てられてから一〇八年になる本校旧本館も今回の未曾有の大地震に見舞われ、少なからず損傷を受けた。多くの卒業生

などから、文化財である母校校舎を案ずる問い合わせが寄せられた。



展示室の雨漏れ



脱落した窓枠

(2011. 3. 12写す)

地震直後、一見した限りでは、大した被害は無さそうに思えた。窓ガラスが数枚破損した程度で、建物自体、些かも傾くことなく堂々とした姿を維持していた。しかし、数日後、校舎内外を隈なく点検

することで、壁のひび割れや柱のズレ、土台部分の煉瓦の破損など、至る所に強烈な揺れによる傷痕が見い出された。特に、旧本館のシンボルともいえる正面玄関の三連アーチを構成する2本の柱のうち1本が台座上で数センチ横にズレて傾いていることや、今まで見られなかった箇所にも相当な雨漏れが生じており、屋根瓦の一部に破損が考えられるなど、建物そのものにかかなりのダメージが及んでいるように思われる。いずれにしても専門家による徹底した調査が急務である。旧本館は百余年の風雪に耐えてきたが、

床下や屋根裏など見えない部分にかなりの老朽化が進んでいることは、数年前の文化庁の調査でも明らかにしている。

このことを受けて本校同窓会は旧本館改修促進委員会の組織を立ち上げ、総力をあげて県・国に文化財校舎修復を働きかけようとしていた矢先、今回の東日本大震災である。明治の先人が魂をこめて創り出した旧本館は大正の関東大震災にも堪えた。そしてこの度の未曾有の大地震にも何とか耐え抜いてくれた。しかし、その後も続く余震で揺れ、軋む音が老校舎の押し殺した悲鳴にも聞こえて仕方がない。

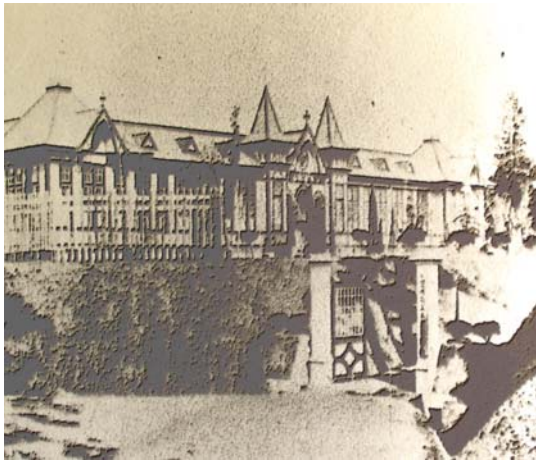
一刻も速い対応が待たれるが、官民をあげて東北地方の地震・津波・原発事故の大災害を克服しなければならぬこの時期にあつては、残念ながら文化財校舎がこれ以上痛まぬよう只々祈り、見守ることしかできないのが現実である。

◆一高の前身は女学校？



右の写真は紛れもなく本校旧本館玄関です。それなのに柱には「安曇野高等学校」の表札が掲げられています。

これは、この4月から始まったNHK朝の連続ドラマ「おひさま」のロケ風景です。このところ、旧本館は「海軍兵学校」や「東京帝国大学」など様々な場面のロケに使われてきましたが、今回は女学校としてのお役目です。これから6月ごろまで、しばしば本校旧本館がお茶の間のテレビに映ります。お洒落な女学校校舎として、視聴者の人気を集めそうです。



← 竣工した当時の真鍋校舎
(現在の旧本館)

国指定重要文化財の旧本館は、多くの同窓生にとって郷愁の場である。それが今、“人気スポット”に急浮上しているという。これまでもしばしば映画やテレビドラマのロケ地になっているが、過日も、同窓会員から「テレビに土浦一高の校舎が映ったけれど、いつ行けば本館内をみることができるの？」との連絡を受けた。そこで、今回から少しの間、この旧本館の誕生にちなんだエピソードを特集してみたい。

土浦中学校真鍋校舎

建築史家一色史彦氏（高11卒）は、昭和49年8月9日、旧本館の保存修理の任を託され、屋根裏を調査した。そして玄關上の屋根裏で、設計者「県技師駒杵勤治」の名前が記された棟札を見出すことになった。

それまで、ドイツ人の設計とされていた旧本館が、本県の近代初期の洋風建築に、多くの足跡を残した駒杵勤治の設計であることが確認された瞬間であった。



真鍋校舎（現在の旧本館）
の設計者駒杵勤治

明治の教育制度

ところで、明治維新政府は、富国強兵の旗印のもと、近代国家の建設に力を注いだ。当然ながら教育制度の充実もその一環であった。

明治4年7月、廃藩置県の直後に文部省が設置され、全国に実施する学校制度を確立するための準備が進められた。欧米先進諸国の教育制度を調査研究したり、国内の教育の実情を調査したりした一方で、「学制（近代学校制度に関する最初の基本令）」の起草の議論も急速に深まりつつあった。ただ、学制の実施に係る予算については大蔵省の反対等もあり難航していた。しかし、翌明治5年8月に百九章（条）からなる「学制」が公布された。

その内容は多岐にわたり、学区制はフランス、教育課程はアメリカ、その他はオランダの影響が色濃いものとなっていた。特に特徴的なのは学区制であった。全国を八大学区に区分し、一大学区を三十二中学区、一中学区を二百十小学区に区分し、各学区にそれぞれ大学校・中学校・小学校を各一校設置するものとした。小学校は国民すべてが就学すべきものとし、その設立には大変な力の入れようであった。こうした結果、近世後期に発達した寺子屋・私塾を母体とし、全国各地に小学校が創設された。同時に藩校等を基礎とした中学校も設立されていった。これにより、我が国の近代学校制度が発足したといつてよいのかもしれない。ただ、一般民衆にとって、学校設立の経費は過重な負担であったばかりでなく、教育内容も一般民衆の生活からかけ離れたものであったため、学制の画一的な実施は、時間がたつにつれて大変難しい状況に追い込まれつつあった。そして、西南戦争後の政治経済情勢の変化などによって、明治12年9月、教育令が公布され、わずか9年にして学制は廃止された。

学制に代わる法令として制定されたのが「教育令」であった。これはアメリカの教育制度をモデルにしたものであった。その骨子は、学区制を廃止して町村を小学校設置単位とし、学校の設立や教育方針を地方の実情に合わせ、各地方で自立的に決定することにした。そのため、自由教育ともいわれるほどに地方分権的色彩が強く、天皇制教育確立の動きと相反することも生じ、翌明治13年には改正されることになった。それが改正教育令である。これにより、教育の中央集権化

が強化された。そして、この改正教育令のもとで諸規則が制定され、教育制度の整備が進められたが、さらなる財政悪化・経済不況の深刻化の中で大幅な教育制度改革が必要とされるに至り、明治18年に教育令の2回目の改正が公布された。これは、経費の節減をめざして学校教育の簡素化を図るとともに、一定の制度整備をも進めようとしたのであった。しかし、明治19年になると、文相森有礼により帝国大学令以下の学校種別の単独勅令が制定され、教育令は実態を生み出さないうちに廃止されたのだった。

この間に、全国各地に小学校の設置が進み、中等教育諸学校はもちろん、高等教育をめざす官立学校も開校された。同時に、独自の教育理念に基づく私学も大都市部を中心に展開されていった。

土浦中学校の設立

まさにこうした中、全国に中等教育をめざす「中学校」が設立されることになった。しかしながら、財政難は如何ともし難く、各県に1校が精一杯であった。

茨城では、明治13年の水戸中学校の設立、また栃木では、明治12年の宇都宮中学校の設立がそれである。

そして、財政状況が多少とも改善をみた明治30年前後、全国各地で中学校の設立が急速に進むことになった。我が土浦中学校も、茨城県尋常中学校分校として、下妻とともに明治30年に産声をあげ、3年後には、県内2番目の中学校として独立し、本格的に歩み出すことになる。ちなみに、栃木県の第二の中学校ともいえる栃木中学校の設立は、明治29年のことであった。



茨城県尋常中学校土浦分校として
使われた亀城本丸跡の新治郡役所

明治30年4月7日、茨城県尋常中学校土浦分校は、新治郡土浦町に設置され、旧土浦城本丸跡の新治郡役所にて事務を開始した。そして入学を許可された80名に対して、4月22日、同じく郡役所にて授業が開始された。まさにこの日を、10年後の明治40年4月、創立十周年記念に際し、正式に本校の創立記念日に定め、今日に至っている。

授業を開始した新中学校であったが、校舎の建設は思うように進まず、土浦尋常小学校の校舎の一部や郡役所の一室、そして民家を借用するなどして仮住まいを繰り返していた。『アカンサス』第11号に詳述)

学校はあるが校舎がない、という窮状については、当時分校から県に提出された書面にも詳しく述べられている。

「当分校仮校舎ノ儀、御指令之趣拝承候処郡役所控所八土間ヲ修繕スルモ僅ニ、十二坪ニテ、四十余人ノ学級ヲ容ルベク、到底旧仮校舎ノ学級ノ生徒ヲ收容スル能ハズ。又、仮校舎(注・内西町十五番地ノ

民家ハ現在三年級六十余名ヲ容シ、余地ヲ遺サズ候ヘバ、新募集生徒百三十余人ノ一半ヲモ入レ難ク候。猶過日御電書ニ接シ、郡長ト協議致候処、目下郡会ニモ差迫リ、後日ハ兎ニ角、当月中ハ是非貸渡シ相成難キトノ事有之候。因テ、一時尋常小学校女子部唱歌室ヲ借入シ、郡役所人民控所並ニ旧仮校舎ノ一室トヲ以テ暫時一年級教室ニ充テ候事ニ決定致ス。尤モ、右女子部唱歌室ハ授業ヲ中止シテ、貸渡候ニ付、長クモ一ヶ月間ニ止マリ、更ニ過当ナル教場ヲ選定セザル可ラザル儀ト存候。

右御報告ヲ兼テ御指揮ヲ仰ギ候。以上。

茨城県中学校土浦分校

教諭 福永 亨吉

明治三十二年四月二十一日

本格的な校舎の建築が待たれる中、土浦町と真鍋町との中学校分校誘致合戦は熾烈をきわめていった。両町とも敷地の寄付を申し出たり、県議員に対する工作なども激しく展開されたりした。そうした紆余曲折を経て、明治32年には土浦町立田に建設されることになり、同年12月に校舎が完成した。12月21日には新校舎に移転したが、その感動の様子は『進修』創刊号(明治33年1月発行)に詠い上げられている。

「立田の麓間、数字巍然として高く雲間に聳ゆるもの、是れなむ我が茨城県中士浦分校なる。長の年月待ちに待ちたる新しの学び舎なる。吾等が始めてここに通ひそめたるは、実に梅花咲く明治三十二年四月二十一日なりき。されど如何せん、事は忽卒の間にいでて、機関とも、柱とも頼むべき一の校舎なきを。

見ずや、東の方には真澄鏡あけたらむ

如き霞浦の水ほのぼのと霞み渡れり。西の空には白妙のみ雪積れる富士が嶺高く聳え、布ひきをなせる桜川は遙かに遶り、鷺が住むその筑波の峯は怒近く、みどり滴るわが学び舎こそ、紅塵万丈、濁りに濁りたる都の学校にまさるなり。」

中学校ト改称ノ件、及茨城県中学校土浦分校ヲ茨城県土浦中学校トシ、茨城県中学校下妻分校ヲ茨城県下妻中学校トシ、又茨城県水戸中学校太田分校ヲ同県久慈郡大田町ニ、茨城県土浦中学校電ヶ崎分校ヲ同県稲敷郡電ヶ崎町ニ、茨城県下妻中学校水海道分校ヲ同県結城郡水海道町ニ設置シ、何レモ本年四月ヨリ開校ノ件認可セリ。

明治三十三年三月八日

文部大臣 伯爵 樺山資紀

『茨城県中学校土浦分校ヲ本校ノ制ニ改メ茨城県土浦中学校ト称シ、分校ヲ稲敷郡電ヶ崎町ニ設置シ、茨城県土浦中学校電ヶ崎分校ト称ス。四月一日ヨリ実施また八開校ス。

明治三十三年三月十日

茨城県知事 柏田 盛文

立田校舎が完成したことや第一回入学生が四年生に進級することになり、分校のままで、教育効果を十分にあげるのが難しいと考えられた結果であった。(卒業には水戸本校への通学が必要であり、それに対応できるのは、当時の交通事情等から、一部の生徒に限られてしまう状況であった)そして、明治33年4月1日、茨城県中学校土浦分校は土浦中学校として独立した。初代校長福山義春以下教員十五名・書記二名・全生徒四百余名のスタートであった。同時に下妻中学校も独立するとともに、龍ヶ崎に土浦中学校分校(現龍ヶ崎一高)、水海道に下妻中学校分校(現水海道一高)、太田に水戸中学校分校(現太田一高)の創設が、それぞれ発せられた。

「茨城県中学校ヲ本年四月ヨリ茨城県水戸

(次号に続く)

A c a n t h u s

第36号

平成23年6月21日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

今年も6月4・5日に「一高祭」が開催された。来場者は2日間で5千人。このうち千人が、連続テレビ小説『おひさま』のロケ地となった旧本館にまで足を運んでいただいた。明治期の洋風建築を代表する旧本館は、多くの同窓生にとって、若き日の命の躍動が凝縮された“思い出の場”そのもの。現在、旧制中学校等で国の重文に指定されているのは5校あるが、その最初でもあった。今号も、この貴重な文化遺産の誕生にちなんだエピソードを紹介したい。

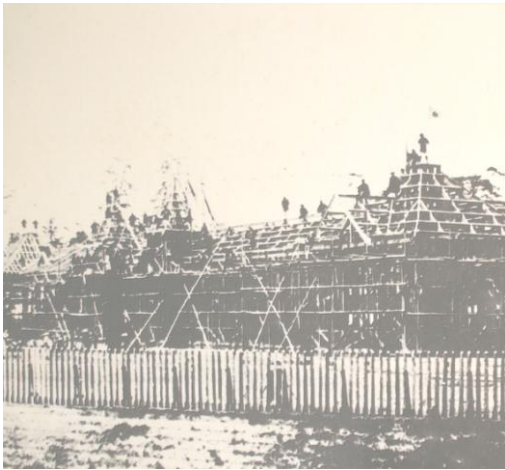


「一高祭」(6/4)・旧本館ミニコンサート

真鍋の新校舎

明治37年7月5日、女学校・県庁・病院などの噂のあった真鍋台の新校舎が上棟式を迎えた。そして、同年12月、土浦中学校新校舎として完成をみた。建設のための予算は総額六万円余。明治36年度の県予算総額が百十萬円程度であったことを考えると、その約6%にも当たる巨額なもので、当時の教育にかける並々ならぬ熱意のほどがうかがわれる。

当時の中学校と言えば実用第一の質素な校舎が普通であったが、西洋の香り漂うゴシック風建築は、大きな話題を提供したばかりか、今日でも創建当時の威容が十分に感じ取れ、見る人を魅了している。さらに言えば、高い天井、重厚な扉、桜色と濃茶のペンキの配色。細部まで荘重で、いかにも勉強にふさわしい雰囲気が出ている。そして昭和51年、旧制中学校校舎としては全国初の重要文化財に国より指定されるとともに、多くの同窓生には、若き日の思い出がつまった郷愁の場として親しまれている。



真鍋校舎の上棟式(明治37年7月)

旧制中学等で国重文は他に四校

ところで、旧制中学校等の国指定重要文化財はわが母校のほかにも4校があり、いずれも大切にその保存がはかられている。津山中学校(現岡山県立津山高等学校)・富山県農学校(現富山県立南砺総合高等学校福野高等学校)・安積中学校(現福島県立安積高等学校)の各旧本館。それに、わが旧本館と同じく駒杵勤治の設計による太田中学校(現茨城県立太田第一高等学校)講堂である。本校は太田一高とともに昭和51年に、安積高校は昭和52年に、津山高校は平成7年に、福野高校は平成9年に、それぞれ指定を受けたのである。

いずれも明治30年前後に建てられた明治期の代表的な木造洋風建築であり、百年以上にわたり、風雪や震災等の試練に幾度となく遭遇し、それにひたすら耐えてきたのは想像するに難くない。



富山県農学校(現南砺総合高等学校福野高等学校)



津山中学校(現岡山県立津山高等学校)

設計者「駒杵勤治」

今般の大震災における本校旧本館については、第34号で破損状況を詳述したが、少なからず損傷を受けた。喫緊の難題を目の当たりにし、拱手傍観では済ませられず、まずは同じ重要文化財校舎の解体修理の実態を調査すべく、この夏には福野高校の視察を計画している。

さて、今号は、わが旧本館の設計者「駒杵勤治」について述べてみたい。

昨今と異なり、建築に関する情報不足もあって、わが旧本館は明治期の洋風建築の外観から、長い間、外国人の設計によると考えられていた。しかし、前号で既述のとおり、保存修理の調査の際に、偶然にも「棟札」が発見され、新進気鋭の県技師「駒杵勤治」の設計によるものであることがまぎれもなく判明した。

だが、「駒杵の人となり」については、わからないことが多い。本校旧本館の設計者であったことが知られたのも、昭和49年の「棟札」の発見が契機であり、その時、すでに本館が竣工して70年余の歳月が過ぎていた。彼が、茨城県技師として任にあったのはたったの2年3ヶ月。その後、内務省技師・海軍省技師を経たのち、官吏を退いて、建築事務所を開設した。そして大正8年に42歳の若さでこ



安積中学校(現福島県立安積高等学校)

の世を去ってしまったのだ。短かった生涯と作品があまり残っていなかったゆえに、「建築家駒杵」が忘れ去られ、彼の偉業は人知れず封印されたまま、時を過ごしてしまったと思われる。

昭和49年に一色史彦氏(高11回卒)によって旧本館天井裏より発見された棟札

上棟式 大棟梁茨城県技師 工学士駒杵勤治

表「上棟式 大棟梁茨城県技師 工学士駒杵勤治」

明治廿七年七月五日

裏「明治廿七年七月五日 請負人石井権蔵」

駒杵勤治は、明治10年、現在の山形県新庄市に生まれ、明治32年9月、東京帝国大学工科大学建築科(現東京大学工学部建築学科)に入学。彼が、なぜ建築学を志したかは知る術もないが、明治10年代になると山形県内でも、文明開化の波が実感できるほど、洋風建築の話題が飛び交い脚光を浴びていたと考えられ、これが建築学に突き進む大きな動機づけになったのではないかと推測できよう。

そして、明治35年12月に、他の8名の同級生より8カ月も早く繰上げて大学を卒業した(当時は9月入学、8月卒業が一般的であった)。すぐに茨城県営繕工師として採用され、翌年5月には技師に昇格している。この辺の事情も明らかになっていないが、当時の県知事である河野忠三が、意欲的に進めていた「中等教育」に力点を置いた施策と無縁ではないようである。茨城県が明治30年代に中学

校や女学校・商業学校等を相次いで設立していった時期とも、まさに符号してくる。特に、彼が任用された明治35年は、県立商業学校(現県立水戸商業高等学校)が設立はされたものの、民家を校舎として授業が展開されていた。だからこそ、校舎の建設は焦眉の急であつただろう。ここに、工科大学長辰野金吾に対して特に優秀な学生を強く望み、「駒杵」を必要とする県側の事情があり、彼もまた、大学を早く卒業することで、その要請に応えたと解釈できる。



真鍋校舎(現在の旧本館)の設計者駒杵勤治

そして、彼が水戸に赴任して2年3ヶ月の獅子奮迅ぶりは、本当に驚嘆に値する。県立学校を中心に次々と公共施設の建築に携わり、キツチリとした図面の設計から施工監理に至るまで手抜きがなく、精魂を傾け、その敏腕を発揮したのである。作品群としては、本校旧本館・階段教室(明治37年・階段教室は昭和49年取り壊し)・太田一高講堂(明治37年)・旧県立商業学校本館(現水戸商高・明治37年)・旧竜ヶ崎中学校講堂(現竜ヶ崎一高・明治37年)・旧高等女学校講堂(現水戸二高・明治37年)・旧麻生警察署・旧下館警察署、そして旧茨城県立図書館(明治36年)・旧水海道中学校講堂(現水海道一高・明治37年)等があげられる(年号は完工)。



太田中学校(現茨城県立太田第一高等学校)講堂

手掛けた洋風建築は、ゴシック・バロック・ロココなど多種多彩であるが、その全てに、彼の建築に対する哲学や情熱、エネルギーが見てとれ、心が揺さぶられる。また「『明治の聖代に於て、…建築が、粗雑拙劣を極めると有つては、他國人に對しても耻かしい譯だ…』(小野武雄著『建築設計図案』序文)をみても、明治人特有の新時代を創っていく気概や使命感を肝に据えていたのがわかる。

前号でも紹介した、建築史家の一色史彦氏(高11回卒)は、「建築家・駒杵」に対し、畏敬の念をもって、

「あの若さでこれだけの仕事をするのはたいへん。知力、気力、体力を使い果たはす」と評するとともに、

「ものに心あり。建築物を作つた人の志や、残してきた人の思いが見えてきたときが一番うれしい。」と述べている。

一色氏も多くの同窓生と同様に、旧本館や、今はない階段教室で青春期を過ごしている。そして何十年も前の高校時代を昨日のように脳裏に浮かべるとともに、旧本館をはじめ、懐かしの校舎に対する思い入れも決して人後に落ちないであろう。そのうえで、建築史学を専門とする、氏ならではの高い見識に裏打ちされた発言は、正鵠を射ているに違いない。

伊勢神宮や佐世保鎮守府庁舎も

茨城県技師として力を尽くした後は、彼は内務省技師として伊勢神宮式年造営に関わり、さらにその後、海軍技師として佐世保鎮守府庁舎建設にも携わったことが知られている。やがて官吏をやめ福岡市で建築事務所を開設したが、大正8年2月、福岡市において結核により42歳の若さで、その生涯を閉じている。

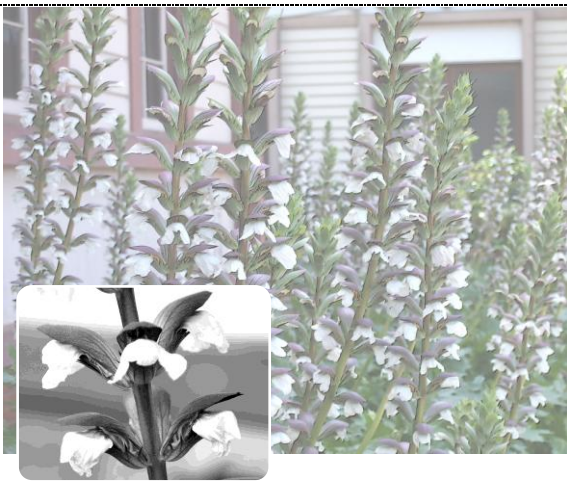
エリート建築家・駒杵の生涯は余りにも短く、しかもその間の業績は、佐世保での功労はあつた(次号で詳述の予定)ものの、本県での大車輪の勲功が群を抜いている。僅かな在任期間にもかかわらず、上述の作品を残すなどひととき輝いたものであつた。また、わが旧本館を見ても、その力量は一目瞭然である。築百年を経た今日であつても、その設計理念は斬新にして気品に満ち、人の目をひきつけてやまない。その空間の中で、学びの謳歌に浴せたのは私どもの誇りである。近年、テレビや映画のドラマロケ地に利用されることが多く、一般の方々の関心も寄せられるようになってきた。特にNHKテレビ小説『おひさま』の中で、長野県安曇野女学校の一場面に玄関や廊下が使用されたため、公開日(毎月第2土曜日)には、これまで以上に多くの人が来訪いただけるようになった。撮影現場を確認し、そのシーンを思い描いたり、ご自身の高校生時代に思いをはせたりして、人それぞれに「旧本館散策」を堪能されているのだ。この6月4・5日の「一高祭」では、来場者五千人のうち、幅広い年齢層の様々な方々が、千人も旧本館を訪ねてくださった。(次号に続く)

A c a n t h u s

第37号

平成23年7月5日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

旧本館は、ふだんは、吹奏楽・弦楽部の活動の場として利用されているが、現役生の多くは、公開日となる‘特別なとき’しか訪れる機会がないのかもしれない。過日、はじめて足を踏み入れたと思われる生徒が最初に口にしたのは「すごい！天井が高い！」という興奮した驚きだった。その‘第一印象’は、多くの同窓会員にとっても、きっと共有されているものだと思う。今号も、この明治期を代表する国指定重要文化財の誕生にまつわる話題を取り上げたい。



旧本館西側に咲き誇るアカンサス（6月28日撮影）

アカンサス意匠は雲岡・敦煌にも

昨年度は二千五百人近くの方にお越しいただいた旧本館。多くの来訪者は、正面に立たれると、ゴシック調の外観と左右の教会をイメージさせる尖塔に見入られる。玄関口まで進むと、三連アーチとコリント様式の柱頭装飾、扉・天井に施された上品な意匠に息をのむ。館内では、明治期の文化の香り漂う木造洋風建築ならではの重厚で荘厳な趣と、凛とした崇高なる学びの威容を全身に感受しながら細部までこだわった多種多彩な美しい・趣向により醸し出される神韻なる美の空間を満喫される。それらはアカンサスの花と葉をモチーフにした模様で、乱暴に言えば、その妙が旧本館の真骨頂であり、醍醐味なのかもしれない。それは、古代ギリシア以来、古代ローマ・中世・現在に至るまで、建築物や内装などの装飾のモチーフとして使用されてきた。特にギリシア建築の円柱の一種「コリント式オーダー」は、これを意匠化した柱頭を特色としている。また専門家によれば、その文様は、ヘレニズム時代に東漸し、ガンダーラ美術や雲崗石窟・敦煌莫高窟等の仏像・石仏にも見られるのだという。アカンサスについては、小紙4号で詳述したが、純白の花が今、6・7月を盛りに旧本館西側花壇で咲き誇っている。深い切れ込みがある大きな葉は、夏の陽光に眩しく映えて根際から四方に伸び、とがった苞葉と筒状の花びらは、穂状にやや垂れさがって見える。実に優雅で愛くるしい。常緑多年草で乾燥・日陰・寒気にも強いという。ギリシアの国花で、花言葉は芸術・技巧・巧みさだと聞く。

佐世保時代の駒杵勤治

旧本館を設計した駒杵勤治は、アカンサスの装飾・意匠を随所に配した。竣工して間もない写真には、正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点にも、見事なアカンサスの四弁の花が雄大に咲き誇っていた。正面から仰ぎ見た三基のアカンサスの花の揃い踏みは、圧巻の極みだったとも想像される（現在は代わりに正面玄関上にだけ四角錐の飾りがある）。

それほどまでにデザイン化されたアカンサスの装飾を追求し、考究した「建築家・駒杵」について、今号はその佐世保時代を中心に述べてみたい。

平成20年10月20日、佐世保市から鶴田清人氏が、本校旧本館の視察に来られた。地元では「佐世保は語ろう会」の郷土史家として活躍されている先生は、『佐世保市史』や関与された母校の旧制長崎県立佐世保中学校創立百周年記念誌『草木ヶ原』から漏れた、明治41年創立の母校校舎の設計者「駒杵勤治」に関する茨城での業績を調査する目的のためであった。旧本館の外観はもろろん資料室や復元教室を丹念に閲覧され、駒杵の足跡を感慨深げに究明・考証された。翌日は、同じく「駒杵ゆかり」の太田一高・水戸商業高も訪問されたようだ。

この調査をもとに、平成23年3月、「させば外史『佐世保近代化建築の源流を訪ねて』」を刊行された。ちなみに同書の扉を飾るグラビアの第1ページは、駒杵設計による本校の旧本館玄関であった。

今般、鶴田氏のご好意により同書の寄贈を受けた。私どもにとっても、茨城を去った以降の「駒杵勤治」をたどる上で

懇望していた貴重な資料であり、同氏の研究成果には深く敬意を払うものである。それによれば、駒杵は、明治38年に茨城県技師の職を解かれ、内務省技師に転じた。そこに至るには、同郷で大学の先輩でもある造神宮技師の伊東忠太と共に伊勢神宮司庁舎（現神宮道場・明治36年竣工）の設計に携わっていた来歴と密接に結びついていたことが推測される。



駒杵勤治・伊東忠太が設計した伊勢神宮司庁舎（現神宮道場）

さらにその2年後の明治40年2月に、今度は海軍省技師として佐世保海軍鎮守府経理部建築科に赴任した。その後10年間（建築家として実働17年）、佐世保鎮守府廳舎などの海軍関係の建築を手がける中で、佐世保市内の公共建築物の設計にも辣腕を振るったのである。その代表的なものが、佐世保中学校校舎と初代佐世保市庁舎であった。およそ市の人口が、明治25年には1万人、明治35年には5万人、明治43年には8万2千人と急増し、市全体が活況を呈していた。そこにモダンな建物の出現は、さらなる発展の象徴として、大きな話題をふりまいたことだろう。これについて『させば外史』では、「…駒杵勤治設計の『佐世保市』の本格的な初代庁舎が落成開庁します。建築家として実に精力的な活躍ぶりです。当時の市

民生活の中において、一時、大輪の花が咲いたような出来事であったと思います。先に触れました『佐世保村』が一転して大都市に変貌する…と一市民の抱いた心情を素直に叙しつつ、駒杵を称え、市の躍進ぶりをつづっている。なお、庁舎の工事総額は2万1千余円であったとされる。わが旧本館が6年前で約6万円だったことから、様々なことが考えられる。



『させば外史』表紙

駒杵勤治の設計理念

次に、駒杵の設計理念はいかにあったのかを考えてみたい。本校旧本館をはじめ、その手腕が発揮された作品群を見れば、ある程度は理解できると言えなくもないが、彼は、佐世保に赴任する前の明治39年に、『和洋住宅建築学』を刊行し、自らの設計理念を吐露している。そこには、彼の建築哲学が端的に語られている。例えば、その「第四章 設計の注意 (Care of Design)」では、

設計に就て最も注意すべき事項を列記すれば左の如し

- 一、外觀の美
- 四、各室に便利を與ふること
- 五、廣潤にして窮屈ならぬこと
- 六、無益なる場所を設けざること
- 七、適當なる日光の射入及新鮮なる空氣の流通を計ること

外觀の美

住宅外觀の美は建築家の高尚なる美的思想と大なる熟練とに依りて達し得べきものなり能く成功したるものは左の數項を具備するものとす

A、式の一致して混用なきもの

式の一致して混用せざるは尤も其外觀の品位を保つに必要なり例へば外部には「ゴシック式を用ゐ内部の裝飾器具等には他の式を用ゐるが如きは断じて不可なり」とす此目的を達せんとするには建築の歴史を精讀して各時代の諸式を講究せざるべからず

B、均衡を保持して中心線の兩翼輕重なきもの又は中心線兩翼相等しきもの

C、中央に重きを置きたるもの

住宅の正面中央部（多くは入り口付近）を他の部分より豊富に裝飾するは美的なり人は先ず目を建物の中央に注ぎ次で他方に目を休むものにして双方の對照上初めて美的觀念を起すものなり…

D、不安定の念を引き起さすべき構造を用ゐざるもの（後略）

（以上『させば外史』より転載）

いずれにしても、駒杵の建築に関する考え方が直接的に表現されたものである。それが、寸分違わず反映されている作品として、わが旧本館は白眉に値すると言えるだろう。



『させば外史』グラビアの最初を飾った旧本館

また、明治43年に上梓された小野武雄著『建築設計図案』に寄せた序文には、「嘗て拙著和洋住宅建築學に於て論述したるが如く、當今我邦に於ける建築には、形態の不備と構造の脆弱なるものが甚だ多い。鎖國の時代ならいざ知らず、苟くも列國と肩を並べて、文化を競ひ明治の聖代に於て、物質的進歩を代表する所の建築が、粗雑拙劣を極めると有つては、他國人に對しても耻かしい譯だ…」とある。

高い理念と強い責任感を横溢させ、新しい時代を切り拓いていく明治人の氣概が伝わってくる。同時に、建築全体の質的向上をめざすうえで、一般住宅への関心が強かったことも読み取れる。

駒杵の海軍における業績

駒杵の海軍における足跡については、軍機密扱いが多いためか、つまびらかにされていない。しばしば朝鮮半島や中国大陆に出張していたようであるが、わずかに朝鮮半島の永興（ヨンフン）にあった防衛隊司令部・防衛隊兵舎・防衛隊司令部病室が知られているに過ぎない。佐世保で明らかなのは海軍工廠のみ。佐世保鎮守府には、10年間も在籍していたので、常識的には、その作品は数多くあったはずである。これについては、軍機密の他に、昭和20年6月の空襲被害や終戦後の軍による焼却処分によつて、資料等が消失してしまったためと考えられる。また、佐世保時代の彼の住居についても不詳である。海軍時代の彼は、高等官5等待遇の奏任官の文官で海軍軍属ということであった（高等官は親任官・勅任官・奏任官の高級官僚。親任官は天皇による親任式をもつて叙任される内閣総理

大臣・各省大臣・陸海軍大将・枢密院長・同副議長・枢密顧問官・内大臣・宮内大臣・特命全權大使・台湾総督・朝鮮総督・大審院長・検事総長・会計検査院長の最高の官吏。勅任官はそれに次ぎ、勅旨により任命される高級官吏。親任官以外の高等官9等中の1等・2等）。赴任当時は、軍人の階級で言えば少佐であり、30歳の駒杵夫妻にとつては恵まれた待遇の生活といえ、当然、高級将校に準じた官舎住まいであったに違いない。

それにしても、彼の大学時代の同期には名だたる逸材が揃っていた。後に東大教授にして、その耐震構造理論が世界に通じるレベルであることを実証せしめた佐野利器、早稲田大学建築学科の創設者で、幅広い作品を世に輩出した佐藤功一、現在の国会議事堂建設のチーフであった大熊喜邦、清水組の技師長を務めた田辺淳吉といった建築史学にその名を燦然と残す面々が、一同に机を並べていたのだ。

晩年の駒杵勤治

大正6年4月、その理由は判然としないうが、駒杵は海軍を辞し、福岡市に設計事務所を開設した。彼なりの建築家人生を貫き通す一大決意であっただろうが、志半ばにして、2年後の大正8年2月27日、結核でこの世を去った。享年42歳。そしてその直前の2月15日には『福岡日日新聞』に「市区改正私見駒杵勤治」が掲載された。その趣旨は「都市の歴史的遺物保存と産業の最大能率と市民の最大利便の融合を顧慮せねばならぬ、その好例は沢山ある」と喝破したものだ。これこそ、90年以上前にあって、「現在」をも透徹し通観した卓見であろう！（次号に続く）

大震災により、
台座からはみ
出た玄関の柱
(2011.8撮影)



←
夕陽に映える玄関口。大震災以前で、
柱は台座中央部に『気韻生動』より

…光陰矢のごとし。旧本館が竣工して 107 年。それを設計した駒杵勤治が
逝って 92 年。そして教室として使われなくなって 31 年。駒杵の縁者も少なく
なってきた。建築に込められた先哲の崇高なる志を、あるいは若き命を躍ら
せ、自らの“心の拠り所”とする私たちの強い想いを、いかに次世代に伝えて
いけばよいのであろうか。私どもに課せられた大きなテーマと言える。これを
心にしめて、この貴重な文化財をめぐる余話は今号で一応の区切りとしたい。

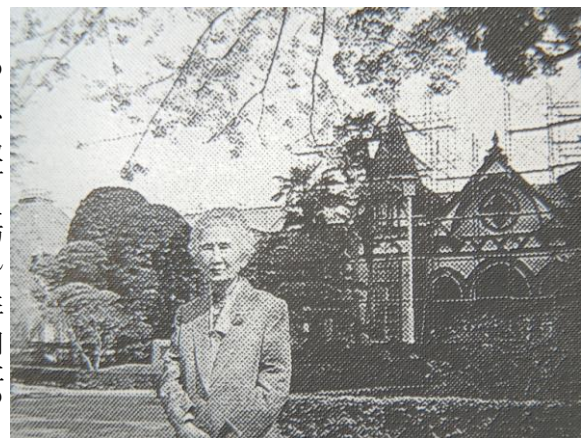
駒杵勤治氏のお嬢様がご来校

それは確か、「創立百周年事業」がス
タートした平成 5 年 4 月のことであつた。
一人の女性が本校を訪ねて来られた。そ
の人の名は「駒杵幸子」さん。駒杵勤治
のご令嬢(養女)に当たる方で、当時 81 歳
とおっしゃっていたと思う(駒杵は茨城
県に奉職中の 27 歳の時に吉村みはる様と
結婚。子宝には恵まれなかった)。ご長
男の奥様である川越順子さんに付き添わ
れ、遠路遙々、広島からの来浦であつた。

お二人を本校まで案内してくださった
のは奥村好太郎氏(高 6 回卒)。奥村氏は、
四季折々に万華鏡のごとく千姿万態をみ
せる旧本館のたまらない魅力に突き動か
され、6 年もの歳月の間、シャッターを
切り続けられていた。そしてこの翌年
に、写真家大久保滋氏(高 8 回卒)とと
もに、旧本館の写真集『気韻生動』を自
費出版(平成 6 年 3 月)されたのだった。

このときは、出版に向けて駒杵勤治に関
する調査研究も精力的に進められ、その
中で広島県在住の幸子様にとどり着かれ、
ご来校に際しても労をとられていたのだ。
幸子様は、うららかな春の陽光に映え、
若き父の熱誠が脈打つ旧本館を、玄関前
でも館内でも、納得されるかのように、
幾度も首を縦にふりながらゆっくりとご
覧になられた。そしてすべてを脳裏に焼
き付けようと、細部にまで視線を走らせ
ている様子がうかがえた。また時々立ち
止まってじっと見遣る姿は、胸中にいる
父に語りかけている時間のようにも見え
た。特に「大棟梁駒杵勤治」の棟札を前
にすると、食い入るように見つめられ、
身をかがめてまで文字の一つ一つを追わ

れていたのは、私どもにとつても、大変
印象に残る一コマであつた。



旧本館をご覧になった駒杵幸子さん(1993・4)

この日、取材に訪れた新聞社のインタ
ビューに対しては、

「義父の建物を見るのが長年の夢でした。

これで親孝行ができました」

と、率直に喜びを語られた。

駒杵勤治夫妻の写真が載せられた資料
に、感想を求められ、

「どんな人かわからなかったもので、本当に
うれしい。来た甲斐がありました」

と、喜色満面の笑みを浮かべられたのだ
った。また、同行の順子様は、

「祖父が偉大な設計技師だったことがわか
り、子どもにも伝えることができました」

と、祖父の偉業を実感され、興奮ぎみに
話されていたのも忘れられない。

こうしたことがつい昨日のように思い
返されるが、その後、お二人とはまった
くの音信不通になってしまっている。こ
れまた世の常であり、やむを得ないこと
なのだろう。

ところで駒杵幸子様は、建築家の真価
を発揮した父の面目躍如となる旧本館を
直接目にされ、詠んだ歌 10 首を『気韻生
動』に寄稿された。在りし日の父の姿を
たぐり寄せつつ、娘としての真情をスト
リートに吐露されている。いずれも心を
揺さぶるもので、その全てを紹介したい。

案内受く土浦一高の本館の
父の設計のモダンさに触る

玄関の屋根に並べる尖塔と
アーチの入り口に独創性見ゆ

重文の指定受けたる学校の
本館遺れど父すでに逝く

資料室の棟札に遺る父の名の
前に立ち停まり暫し額すく

建築の技存分に発揮して
本望ならん死したる父は

重文に指定されたる父上の
建てたる本館われは見飽かず

父の霊眠り安らからん
建築の技認められ重文となりて

帝大の建築学科を父上は
主席で卒業されしと聞きぬ

両親の写真初めて眺めつつ
語りかけおり父と母とに

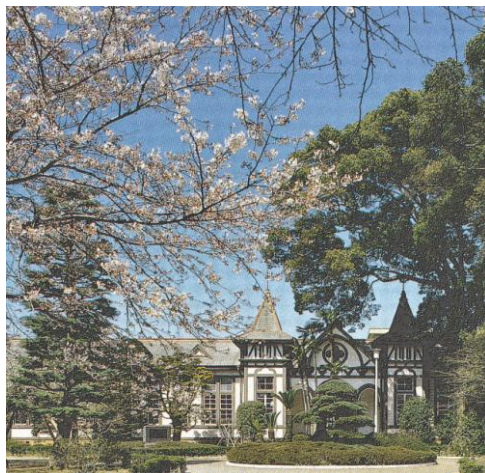
勝れたる建築技師の名に
恥ずることなくわれ生き抜かん

奥村・大久保両氏の母校愛

ここで、奥村・大久保両氏のご厚意について一言ふれておきたい。お二人は、本校百周年事業の際に「何かの役に立ててほしい」と上梓された写真集『気韻生動』三百部を本校に寄贈してくださった。母校愛に燃える両氏は、多大な自己犠牲を歯牙にもかけず、旧本館写真集づくりに勇往邁進され、出版にまで漕ぎつけられたのだ。奥村氏は、撮影ノートに「…学校の許可は営利を目的としない条件…。20回近く取材したが、季節による変化は素晴らしく、その折々に見せる顔はいつ見ても飽きさせない魅力をもっていた。…どうしても入れたいカットが：雪景と夜景である」と記されている。ここからは、母校に寄せる両氏の底知れない「誇り」「期待」「愛着心」「強い絆」がくみ取れるとともに、すぐれた美的感性や芸術的達人技をもつて苦心惨憺・創意工夫を重ねつつ奮闘する様子が彷彿させられるのだ。両氏の熱い至情の姿勢には、ただただ敬服するばかりである。

両氏のお志を確かに受け止めた私どもは、周辺の方に同写真集の購入を懸命に呼びかけた。するとまたたく間に三百部は完売され、百万円もの浄財に形を変えた。そしてそれは、両氏から寄付されたものとし、「百周年基金」に組み入れさせていただいた。また『気韻生動』にある写真を、本校百周年記念誌『進修百年』のグラビア「春・夏・秋・冬」に拝借したい旨をご依頼申し上げると、一も二もなくご快諾を賜った。さらにはその原版まで頂戴するご温情にも浴したのだ。両氏には感謝することしきりなのである。

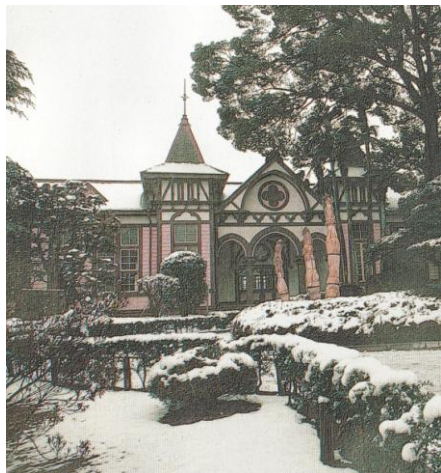
『気韻生動』にある両氏の渾身作を本号に一部掲載し、その景観美の精華を心に刻むことで改めて御礼の意を表したい。



旧本館の春(『気韻生動』より)



旧本館の夏(『気韻生動』より)



旧本館の冬(雪景)(『気韻生動』より)



旧本館の夜景(『気韻生動』より)

勤治の孫駒杵健治氏からのお手紙

閑話休題。駒杵幸子様の甥に当たり、草加市在住の駒杵健治氏(幸子氏夫妻同様、健治氏のご両親も駒杵の養子であった)からも、平成14年3月にお手紙をいただいた。その主要部分を抜粋すれば、

「…私は駒杵健治と申します。…貴校旧茨城県立土浦中学校の洋風建築を建築したと言われる、駒杵勤治の孫に当たります。平成6年、奥村好太郎氏が「刊行されました際、私の所を尋ねられ、勤治の写真をお貸しした事もございました。…駒杵幸子を広島から呼んで、貴校を見せただけでしたが、私は同行する機会を無くし今日に至って居ます。」

…来る3月22日(金)に、私共夫婦と娘の3人でお訪ねし…室内及び展示室を拝見したいのですが…

祖父勤治は、大正8年2月27日福岡で亡くなりましたが、亡くなる12日前の15日に私が生まれ、喜んだ祖父が私に健治の名前を付けたと父から聞いて居ます。祖父には子供がなく、私の父と母を養子養女とし、更に駒杵幸子の主人駒杵常作を養子にしたらと聞いて居ます。…

私の子供に、祖父の残した重要文化財の建築物を見せておくのは、私の責任でもあると思う、今回の土浦行を…」

とあり、本校に訪問したい旨が述べられていた。ただ、実際に来られたのかどうかは、今日に至るも確認できていない。

ちなみに『気韻生動』には、勤治の身内としては養女幸子さん、孫(別養嗣の長男)健治氏、甥の駒杵成一氏らがご存命との記述がある。しかしこれは17年前のこと。現時点では、勤治の縁者に関しては、詳細は不明としか言いようがない。

旧本館における喫緊の課題

聖堂等の建築を通して蓄積されてきた厳粛な空間と光量の最大限を追求したゴシック風建築。その技術の粋を尽くした旧本館。天を指す尖塔、多彩なアカンサス意匠、手すきガラスの大窓、高い天井と高床の室内。どれもこれも目を見張る匠の技。築後107年を経た国重文であるとともに、同窓生にとっては青春の聖なる記念塔にもなっている。今秋にはここで結婚式を挙げる卒業生もいると聞く。

旧本館は、一部教室が部活動に活用されているが、30年以上にわたり通常授業には使用されていない。にもかかわらず、従前からの雨漏りなどに加え、先の大震災の影響(小紙34号で詳述)もあって、損傷は建物全体に拡がっている。今後は、解体修理を含め、保存の方法を真剣に検討することが喫緊の重要課題であるのは論を待たない。それは、単に貴重な文化財を保存する意味合いにとどまらず、「大棟梁駒杵勤治」の志を後世に継承させていくことにも通ずる。これが今の私共に課せられた使命ではないかと思う。(完)

同窓生の「心のふるさと」であり、先人の志が詰まった本校旧本館は、築後 100 年を越えている。この国重文をいかに保存活用していくのかは、私たちに突きつけられた大きな課題である。今夏訪れた富山県の南砺福野高校では、国重文の建物はすでに解体修理を済ませ、その維持活用は、同窓会も加わり図られていた。そこで私たちも、旧本館を未来永劫に引き継いでいかねばならない、との決意を一層強くした。この決意を熱気の渦とし、共感の輪を広めたい。



富山県立南砺福野高校を訪問

この夏の 8 月 1 日、私たちは富山県立南砺福野高等学校（旧富山県立農学校）を訪問した。同校には、平成 9 年に国より重要文化財の指定を受けた旧農学校本館があり、その校舎は、すでに平成 17 年に解体修理を完了させ、保存活用に関する活動も精力的に展開されているというのだ。今回は、本校の旧本館と同じように、明治期を代表する国重文の学校建築について、その維持利用の実情を視察し、本校における管理運営に資する調査研究を推進する、との目的で実施された。

ご参加を賜ったのは、経歴、年齢や職業を異にするものの、本校あるいは旧本館に、並々ならぬ熱き心を寄せる関係者 19 名。何とか都合をつけられ、経済的・時間的な自己犠牲を顧みず、万難を排し駆けつけて来られた気高い志が一人一人に匂い立つ。中には、周りから厳しい視線が注がれたり、来浦するのに車で 3 時間余を要したりする「試練」をも泰然として超克し、強い使命感をもって一行に加われた同窓生もおられた。もちろん初めてお目にかかる方々も多く、向かう車中では、資料に綴じられた名簿に基づき、それぞれを紹介するシーンが設けられた。

砺波平野の散村に屹立する学校

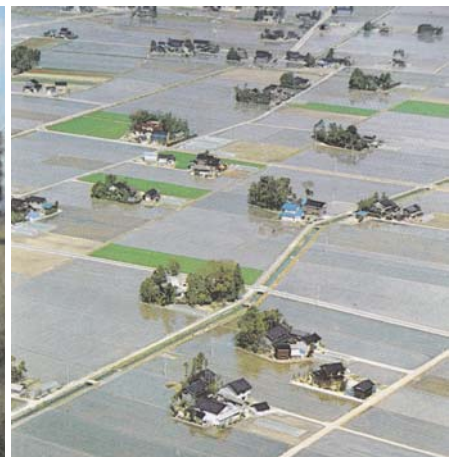
同校が建つ福野は、砺波平野の真っ直中に位置し、今でも典型的な散村の形を残す米作農業地帯である。渺々たる田園風景を目の当たりにすると、「農学校」の創設に、大きな期待をこめた先哲の沸き立つ心意気が、そよぐ風の音となって伝わってきそうな感じさえしてしまう。

ここで、この地域の社会環境の特色をなす「散村」について付言しておきたい。

それは、集落の平面形態の一つで、広大な耕地の中に家屋（孤立住宅ともいう）が戸数ずつ分散している村落をいい、砺波平野では「散居村」とも呼んでいるものだ。集落の発生が新しく、協同防衛・共同水汲み場などの必要がない場合や新大陸の大規模機械化経営を行う農業地帯などによく見られる。わが国では、富山県の砺波平野・黒部川扇状地、香川県の讃岐平野、静岡県の大井川・天竜川などの扇状地や、人口密度の低い北海道の開拓村などで多く認められている。

散村の典型が、ここ庄川扇状地（砺波平野）で、ここではフェーン現象によって火災が発生しやすく、類焼防止の目的で散村形態が発達したといわれている。220 km²に 7000 戸程度が散らばっている景観は、16 世紀末から 17 世紀にかけて成立したと考えられる。また庄川はしばしば氾濫したため、この地域に住みついた人々は、平野の中でも若干周囲より高い地点に居を構え、治水対策に苦心惨憺しつつ周囲を水田として開発してきた。このような住居と水田の配置は、農民にとってはいきわめて効率的で便利であった。そのため、前田氏の支配下にあった時代でも、農民たちは引地・替田を行って自宅周辺に耕作地を集めた。ただ、家屋が個々に孤立し集落を形成していないがゆえに、冬には厳しい風雪に直接さらされることになる。これに対処する生活の知恵として、家屋の周囲にカイニョ・カイニユと呼ばれる屋敷林が設けられているのだ。世界的には、イギリスの大半、フランス西部からライン川下流域、エジプト、

中国東北区の北部など民族・地域に関わりなく認められているものである。



空から望む砺波平野の散村



カイニョに囲まれた散村の家々

福野 IC を降りると、バスは、50 m くらい離れて建つ農家が、それぞれの周囲に広がる美田を今もなお守り続ける。「散村」の中を走り抜けていく。すると、遠目にも「明治期の建築」とわかる学舎が徐々に大きくなってきた。正門玄関に到着すると、学校・同窓会の皆様がそろって出迎えてくださり、さっそく国重文建物の一室に通された。そして、学校の歴史や文化財の保存活用等について、懇切丁寧なご説明を頂戴したのだった。

学校の設立と校舎（国重文）建設

最初に、文化財校舎を映像で紹介するDVDと、用意していただいた資料をもとに、概説を一通りうかがうことができた。その後、国重文の学校施設の巡覧・視察に移ったが、そこでも、種々雑多な多くの質問に誠実にお答えしていただけたのは、本当にありがたい限りであった。そもそも富山県立農学校は、明治34年、それまでの富山県簡易農学校（明治27年創立）を改称し設立された。簡易農学校は、砺波郡の素封家島家に、天保9年に生を受けた巖氏の高潔なる献身的活動により発足したものであった。氏は「砺波地方の産業育成のためには人材を養成する農学校の設立が緊要だ」と訴え続け、早くから県当局や地元有力者に熱心に働きかけていた。しかし、志半ばで病魔に冒され、明治12年、42歳の若さで亡くなった。だが、農学校の建設と、その資金援助として資産の大部分を遺贈する旨の遺言状を書きしためていたため、氏の遺志は地元有志に受け継がれ、15年後に「簡易農学校」の創設として結実された。

ただ、創設はされても、廃校となっていた小学校を利用するなどして、本格的な校舎は存在しなかった。こうした状況は、簡易農学校から県立農学校へと移り変わっても同じであった。そしてようやく明治36年に、和洋折衷木造2階建ての本館と、左右両翼に平屋建ての教室棟からなる新校舎が竣工し、島巖氏の念願は名実ともに達成されることになった。

新校舎の設計施工は地元砺波市出身の宮大工藤井助之丞氏。本校の旧本館がゴシック様式であるのに対し、この建物は

17〜19世紀のアメリカ大陸で住宅建築として発展したコロニアル様式。細い板を段が付くように重ねた下見板張り、ペンキ塗り、上げ下げ窓の西洋建築のデザインを基本としている。外観的には、正面中央の玄関ポーチ部分が建物から突出し、その上にのるのが、ギリシア風飾り窓を背後にもつバルコニー。さらに2階屋根中央の半円屋根飾り（ゲープル）が建物全体に荘厳な趣を醸しだし、思わず目を奪われる。これは、バロックに社寺建築の細部が入り交じった、南蛮風とも言える幻想的な和洋折衷のしつらいなのだ。また1階玄関の開き扉の意匠と、その上部にある半円形の欄間も見応えがある。正面中央に装飾がまとめられているのは本校と同じで、当時の日本における洋風建築の特徴がうかがい知れよう。



2階屋根中央のゲープル



国重文「校舎」の正面中央

学校と地域の連携による永久保存



学校の歴史資料が並んだ展示室

保存修理の概略をたどると、大正2年に、外壁が淡い緑色から、現在の桜色に塗り替えられた（本校は創建時より華麗な桜色）。昭和41年に校舎が全面改築されるにあたり、農学校本館は、永久保存のため、昭和43年に敷地内の現在地に移築され、改修工事も行われた。その際に、創立の功労者である「島巖」の名と、その浄財で設立されたことを後世にまで伝えるため、当時の吉田実富山県知事によって「巖浄閣」と命名されたのであった。平成9年には、国の重要文化財に指定された。そして、平成14年からは明治期の姿に復元する修復工事が始まり、「正門」の復元とともに平成17年に終了した。

その間、巖浄閣は「島巖」や「学校の歴史」に関する資料の展示室、あるいは生徒の芸術作品展覧会場として利用されてきた。現在では「県立美術館移動美術展」「特別企画展」「コンサート会場」など、文化活動の拠点として、外部に向けても多様に活用されている。管理運営面では同窓会も加わった委員会が推進役を担い、保存維持面では、行政当局が強い関心を寄せ、機敏に対応していると伺う。

損傷が広がる本校旧本館の今後は

「モノにコロコロあり。先人のご苦労に対する感謝の念を持つ気構えがなくなると、文化財を語るなかれ」と、建築文化史家一色史彦氏（高11卒）は以前に話された。今回の「巖浄閣」では「先覚者への感謝の念」が、その「名」の中に直接的表現で込められているのに接し、一色先生の言葉が頭の隅をよぎっていった。また、先人の遺産たる文化財の保護・保存・維持が囁く叫ばれ出して久しいが、現実の場では「守っていいこう」との気概と情熱にあふれた人々の必死の叫びと行動によって、それがこなされてきた経緯も把握できた。もし「守ろう」とする大きなうねりが起きなければ、文化的価値がどんなに高いにせよ、建造物は所詮消滅する運命にあるのかもしれない。そうした意味で、今回の視察は実に有意義であった。

それにしても、「教育の充実こそ、日本の将来を築く基礎づくり」という先哲の志が凝縮され、私たちにとっては「宝物」と言える本校旧本館。竣工して107年を経て、損傷拡大を懸念する声は次第に高まってきている。先の大震災による壁の剥落やひび割れは、至る箇所で見られる。過日も、玄関の柱が台座よりずれてしまったため、文化財専門家による修復工事がなされた。その折にも、単なる「ずれ」とどまらず、長年の風雪による柱の中心部（芯柱）の腐食は甚だしい、との指摘を受けた。所轄官庁である国・県は、調査には足を運んでいたが、本格的補修については、今も口を濁すばかりだと聞く。今や「待ったなし」だと心得る者には、もどかしさだけが漂ってくる…。



明治期における旧土浦中学校の正門光景
(佐賀進著「スケッチで綴るふるさと土浦」より。
今号の絵画・写真は同著と「新治村史」より転載)

「生徒人員町村別調査表 明治40年1月現在 土浦中学校」なる書面に見入った。現在とは、かなり趣を異にする町村名や入学生徒数が記され、興味をかきたてられた。特に町村名では、すでに消滅している地名が多く、驚きとともにその経緯に好奇心もそそられる。深い絆に結ばれ、ぬくもりと愛着に満ち、耳にすると温かく心の琴線がゆらされる故郷の地名。それがなくなるほどに変貌してきた私たちの地域。この激動の一端を、今号より取り上げてみたい。

明治40年「生徒人員町村別調査表」

「滄桑(そうそう)の変」といわれるがごとく、時の流れとともに世の中は変化する。そうした「世の移ろい」を端的に示す資料が本校に所蔵されていた。明治40(1907)年1月の「生徒人員町村別調査表」(左側「一覧表」である。本校が創立して10年、真鍋校舎(現在地)に移転して2年が経た時点における、在籍生徒の出身町村

生徒人員町村別調査表 明治40年1月現在										土浦中学校									
町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数	町村名	生徒数
新治郡	五五	志筑	七	江戸崎	一	真鍋郡	四	那珂郡	二	小幡	七	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
土浦	四三	新治	四	行方郡	二	新治	一	那珂郡	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
真鍋	一七	七會	七	秋津	六	新治	一	那珂郡	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
上天津	二六	都和	一	立花	二	大村	一	中野	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
下天津	四	藤沢	五	行方	三	五所	一	後島郡	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
美並	四	斗利出	九	手賀	二	東茨城郡	一	水戸市	九	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
牛渡	〇	栄	八	武田	一	小川	七	縣外	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
佐賀	四	九重	六	小高	二	川根	二	東京	四	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
安飾	三	栗原	四	玉川	一	鯉淵	二	静岡	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
志庫	一	山莊	三	玉造	四	竹原	四	大合	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
関川	七	中家	六	現原	一	堅倉	二	栃木	二	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
三村	五	東	三	筑波郡	二	磯波	一	栃木	二	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
高濱	七	稲敷郡	二	葛城	三	西茨城郡	七	千葉	四	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
玉川	三	浮島	二	旭	四	岩間	三	福岡	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
田余	二	舟島	三	大穂	一	笠間	一	石川	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
石岡	二	朝日	二	小田	四	北那珂	一	和歌山	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
尾會	四	旭崎	一	北條	四	北那珂	一	青森	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
林	〇	柴崎	一	筑波	二	結城郡	一	学年別	一	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
意瀬	二	阿見	四	田井	二	豊加美	一	一学年	二八	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
葦穂	九	木原	二	島山	二	一学年	二九	二学年	二九	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
柿岡	二	岡田	一	島山	二	一学年	二九	三学年	六九	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
小幡	一〇	安中	二	谷田部	一	一学年	二九	四学年	九六	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
小幡	七	安中	二	小幡	一	一学年	二九	五学年	五七	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一
小幡	七	安中	二	小幡	一	一学年	二九	合計	四二九	小幡	一	安中	二	小幡	一	小幡	一	小幡	一

とその人数を記したものである。この表を一瞥して気づくことがいくつかある。たとえば、土浦、真鍋、上天津、都和などは、現在でも土浦市内の地区名になっているので、どのあたりなのかかわかるが、真鍋と同じくらい生徒が多い中家となると、すぐには見当がつかない。同様に、美並・玉川・田余などは土浦からそれ程遠くない地域であっても、今となつてはなかなか察しがつかない。その一方で、志筑、斗利出、九重、小幡などは現在でもそのまま小学校の校名として存続している。どの圏域かは把握できる。いずれにせよ、この表を凝視していくと、首をひねったり、興味を惹かれたりするところと次々と浮かび上がってくるのである。

そこで、この資料を通して、当時の本校(旧土浦中学校)生の通学範囲や方法を探るとともに、度重なる市町村合併の波に飲み込まれ、消えてしまった一世紀前の郷土

の旧町村名を掘り起こしてみたい。また、往時における地域社会の実相にも迫ってみたい、と思う。

周辺農村からの生徒が結構多い

まずは、出身町村別の人数に着目してみよう。旧土浦市(平成18年に新治町と合併する以前)にあたるところは、土浦(43名)・上天津(26名)・都和(19名)・真鍋(17名)、そして、消えてしまった中家(16名)である。中家村には、現在の上・中・下高津、小松、佐野子、飯田、矢作、穴塚、粕毛の各地区が組み入れられていた。さらに、現在の右根、中村東・南、永国、大岩田、小岩田、鳥山、乙戸などの東(13名)も含まれるので、合計134名。これは全生徒429名の31.2%に達していた。ちなみに、中家村は昭和12年に、東村は昭和14年に、土浦町に編入された。(市制は、昭和15年に真鍋町と合併して施行された)

旧土浦市に次ぐのは、石岡(23名)・関川(7名)・高浜(7名)・三村(5名)の旧石岡市にあたる地域で42名である。また、平成の大合併で石岡市になった旧八郷町の小幡(10名)・葦穂(9名)・小幡(7名)・瓦会(4名)など柿岡盆地の村々からも35名が通学していて、随分と大勢いるのが目を引く。

※ 葦穂村 恋瀬川上流、加波山に連なる足尾山麓に位置し、当時の村の人口は3千人に満たない寒村。

※ 小幡村 筑波山の北麓に位置し、江戸期には筑波・鹿島への交通路で宿場町的性格も有していた。明治期の村人口は約2・5千人。

その南に位置する旧千代田町(現在のかすみがうら市)は、七會(17名)・志筑(7名)・新治(4名)をあわせると26名になり、これまたわりと多いと言える。

※ 七会村 恋瀬川支流雪入川流域に位置し、上稻吉・下稻吉・上佐谷・下佐谷・雪入など7大字からなる。明治期の人口は約3千人。

さらに、今のつくば市にあたる町村を拾ってみると、葛城・旭・大穂・小田・北条・筑波・島名・谷田部などの筑波郡（29名）と、新治郡の栄（8名）・九重（6名）・栗原（4名）の旧桜村。それに稲敷郡荊崎村（2名）が加わってくるので、総計49名、全生徒の11.4%であった。



農村部に位置する藤沢の昭和初期の町並み（現土浦市）

出身地域を現在と比較すると

こうした出身町村を現在の市・町に重ねて比較してみる。まず、つくば市内の生徒は、現在では323名で本校（土浦一高）全体の33.4%を占め、旧土浦市のその204名、21.1%を大きく上回り、隔世の感を禁じ得ない。次に、明治期からずっと農村部に位置し、旧土浦市に隣接した町のある中学校に注目したい。現在、この中学校からは本校に5名が通学していて、その校区には、当時と変わらない3つの小学校がある。この表に目を通すと、その3小学校区の出身者は合わせて17名にも

及んでいるのだ。実は、こうした農村部からの激減傾向は他の多くの中学校・校区にも共通している。換言すれば、当時は片田舎の小村からも多数の生徒が、かなりの負担を乗り越えて旧土浦中学校に入學していた状況が理解できるのだ。このことにこそ、刮目しなければならぬ。もちろん進学率も高校数も、その時とは桁違いで比べられないのは重々承知のうえだが、それを勘案しても、現在の事態は余りにも様変わりが激しく昔日の面影はほとんどない。そこで、明治期の近隣の農村社会の動向を少し考察してみたい。



1918年に開通した筑波鉄道以前の乗合馬車



汽車が停車する大正期の土浦駅。1896年に開業

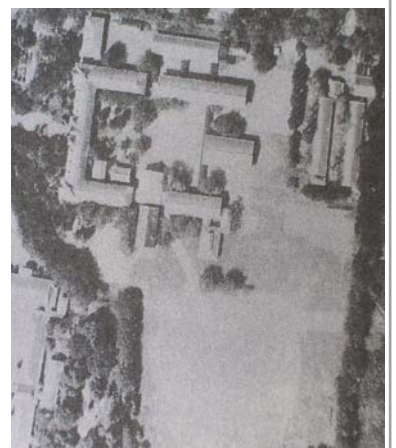
明治期は農村でも人口増加

明治期の日本は、富国強兵のもと近代工業化への道を突き進んだ。それは、農産物を原料とする繊維等の軽工業が中心であり、産業の主体はあくまでも農業であった。重工業が勃興してきた明治末期に至っても、第一次産業人口はまだ7割もあり、国民の大部分は農村の伝統的な地縁社会を構成していた。（第一次産業人口が5割を切るのは昭和35（1960）年頃）。茨城県下市町村別人口統計によれば、一時的には、出稼の増加や若者の向都志向等によって激減は認められるが、明治期を通した本籍人口は、いずれの町村においても漸増もしくは微増していた。

そうした中で、明治22（1889）年に市制・町村制が実施され、全国で31の市が成立した。関東では東京・横浜・水戸で市制が施行された。この頃の水戸市の人口は2・5万人余。県内で水戸に次ぐ土浦の人口は1万人余の町に過ぎなかった。ちなみに当時の県内の主な町の人口をあげてみると、土浦に次ぐ古河が1万人弱、下館・龍ヶ崎・太田・下妻などの町はほぼ4・5千人であった。日立は何とまだ村であり、その人口は2千人余にとどまっていた。（人口はすべて明治24年調査）市や町でそれほど人口が多くないのは、生活するうえで町と村との格差がたいしてなく、人情味にあふれた農村に安住する人が多かったからである。そして村々では、地主層が地域経済や政治を担うとともに、地元の市・町とは様々な交流を活発化させ、一体的な関係が構築されていたと考えられる。一方、明治期に中学校に進学できるのは、ごく限られた裕福な家庭（地主、豪商、企業家、士族等）の子弟に限られていたのだ。

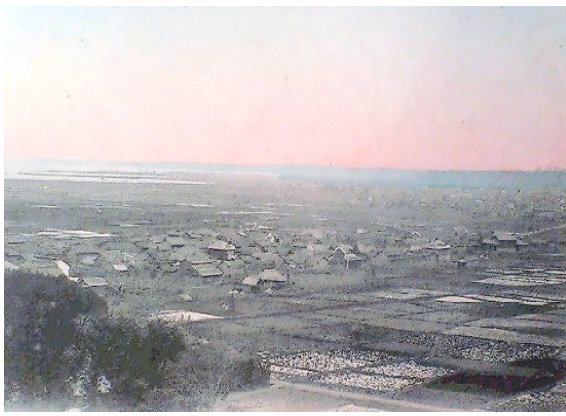
旧制中学校の学校生活は

ところで、明治40（1907）年には、義務教育年限が4年から6年に延長され、その就学率はほぼ100%が実現されつつあった。中学校について言えば、明治19（1886）年には、全国で56校、生徒数は1万人しか存在しなかったが、明治33（1900）年には194校、7万8000人になり、明治43（1910）年には、302校11万人と急増していき、中等教育機関への進学率も12.3%と右肩上がりだった。その頃とはほぼ同じ大正初期の学校生活については、中西秀男氏（中17回卒）が『進修百年』で屈託がなく述懐している。「…交通機関は常磐線の汽車と土浦・北条間の乗合馬車、それに霞ヶ浦を麻生あたりまで通う蒸気船。バスはないから、自宅が遠すぎる者は寄宿舎に入ったり、親戚・知人のところに住み込んだりした。自転車通学もかなり多く、石岡からは片道1時間はかかった。…男も女も老人も子供もみな着物を着てくらし、洋服は学校の男の先生と警官と駅員ぐらい。金のボタン制服で通学するのはエリート・コースに乗った意識があった」（『抜粋要旨』）と書き綴り、その様相が垣間見えてくる。何にせよ、資料を読み解くことを通し、明治期の地域社会を顧みるとともに本校の長い歴史も理解できるのだ。（次号に続く）



大正期の本校全景（右上の2棟寄宿舎）

平成23年12月6日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



明治40年頃の真鍋公園（現在の愛宕神社付近）
より霞ヶ浦（左遠方）と土浦町（右遠方）を望む
（「よろずや商会絵葉書ギャラリー」より転載）

本校にある明治40年の「生徒人員町村別調査表」。この表には、今では定かでない村がいくつか登場する。現在の土浦市内や近隣地域にかつて存在した村々だ。故郷の町村名は、地元の人にとっては、自分の身体の中に溶け込み、人の情けや温かみ、強い絆を漂わせる響きをもつ。それらが消えたのは市町村合併によるためだ。今号は、「調査票」にある町村について、その名の変遷をたどった紙面裏側「資料」を見つめつつ、明治・昭和の大合併を述べてみたい。

明治期の「生徒人員町村別調査表」

土浦町と真鍋町が競って並立していた明治大正期。その頃の町村が記載された「生徒人員町村別調査表 明治40年1月土浦中学校」が校内に残されている。そこには、明治期以来、推進されてきた（市）町村の合併・統合により、消滅してしまっただけでなく、歴史的な地名もあり、少しく寂しい思いを禁じ得ない。大地に刻まれた地名は、先人の息遣いや感情、意識が込められた伝言にほかならないと考えるからだ。それらを感じ取る意味でも、今・次号は、この調査表にある私たちの「故郷」の町村について、合併の歴史をたどってみたい。

明治の大合併

江戸時代の地方は、自然発生的な地縁共同体として、街路ごとに町が、農村では集落ごとに村があった（村は一村一領主とは限らなかった）。その数は、全国で村が約7万、町が約千であった。明治の初年を迎えると、江戸期の町村は否定され、円滑な行政執行を推し進めるべく大区・小区制がひかれた。その後、数度の制度改正を経て、概ね、小学校1校の区域とする約300〜500戸を町村の標準規模とした市制・町村制が明治22年に施行された。これが明治の大合併と称されるものであり、これにより、町村は15,820（市は39）と、ほぼ1/5に激減するとともに、地方を行政統治する地方自治体（地方公共団体）としての地位を確立することになった。ただ、「自治体」とは名ばかりで、市町村は、強固な中央集権体制の構築に躍起になる世情にあつては、様々な分野で中央政府の厳重な監督と統制下におかれ、きわめて弱い自治権しか持ち得なかった。つまり、その自治は強い官僚的拘束と有力者支配を軸とするものであった。その後、町村合併は進められ、明治31年までに2,800余りまで減少した。やがて合

併の波は鈍化するものの、戦後の昭和22年には、市町村数は10,365となり、江戸時代の約1/7に達する程に減じられたのだった。

《余話》市制・町村制が施行された明治22年。この年の4月3日、水戸の友人菊池謙二郎（後の水戸中学校長）を訪ね、徒歩旅行していた正岡子規は、現在の本校の斜向かいにあった真鍋公園（愛宕神社付近）に登り、「霞みながら 春雨ふるや 湖の上」と詠んでいる。（小紙第25号で詳述）
また、「生徒人員町村別調査表」が作成された明治40年。この年は創立10周年記念式典が挙行されるとともに、11月24日には土中野球部が、当時「向かうところ敵なし」と天下に鳴り響く慶応普通部に試合を挑む。「進修」には「8回を終り、4-2でリードを許す」旨はあるが、最終結果の詳細はない。観戦した飛田徳洲（学生野球の父・水戸中出身で当時早大野球部）は「土浦軍は善戦して敗れた」と『野球人国記』に記している。

昭和の大合併

新憲法に基づき、昭和22年4月に地方自治法が公布された。これにより、旧来の市制・町村制は廃止され、市町村の自治権の拡張と民主化の促進が図られ、同時に新制中学校の設置管理、市町村の消防、自治体警察の創設、社会福祉、保健衛生関係等が、新たに市町村の事務とされ、その役割は大幅に増大した。そこで、行政事務の能率的処理と財政確保のため適正規模の実現に向けた合併は不可避の状況となり、昭和28年には、新制中学校1校の管理に要する規模として、概ね8,000人以上の住民を有することを標準とする「町村合併促進法」が施行されるに及ぶ。さらに、町村数を約1/3に減らすことを目的に「町村合併促進基本計画」が昭和28年に閣議で決定され、昭和31年には「新市町村建設促進法」も施行された。これにより、全国的に市町村合併が加速され、昭和28年10月時点で、3,968もあった市町村数は、昭和36年には約1/3の1,472に減少していった。この巨大な合併のうねりが、昭和の大合併と言われるものであった。その後、昭和30年代後半からの高度経

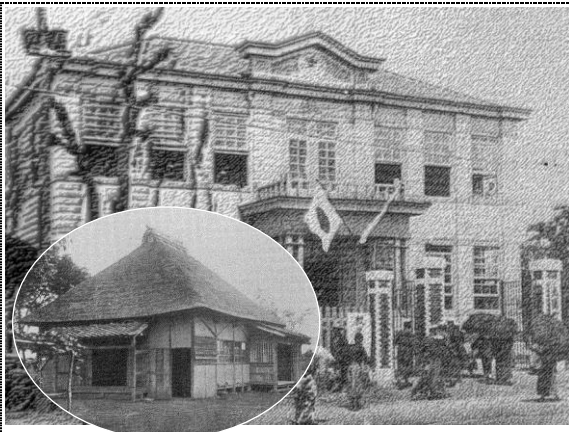
済成長期における都市化やモータリゼーションの進展を背景とする合併の動きが生じると、昭和40年に「合併特例法」が制定され、地域拠点を意図した合併（郡山市・岡山市・倉敷市・富山市など）や、新産業都市の指定をめざした14市町村合併の「いわき市」など、大規模合併が話題をよんだ。また、高度経済成長期には山間部の過疎化が進んだため、隣接する市町が山間部を取り込んだ合併もみられた。さらに、市制施行の人口要件が緩和されたため、人口3万人以上の市制の実施を指向した合併も繰り広げられた。

地名は古代から続く無形の遺産

明治以来、時々の社会の動きに絡んで繰り返されてきた市町村合併。その中で消えていった村名や地名は数多いと思う。紙面裏側「資料」は、本校所蔵の明治40年「調査表」に掲載されている全町村について、消失した村も含め、現在の市町村の地域に符号させるとともに、古代・近世まで遡ってその名を可能な限り引きあげている。通覧すると、現在では存在しない中家村や東村（いずれも現土浦市）、玉川村、田余村（いずれも小美玉市）なども文献に名を残す由緒ある地名であることに驚かされる。また、地域の様子を皮膚感覚で意識する者にとっては、土地の名は、実はそれなりの由来や地理的な意味をもっていることが推察でき、加えて、文学や歴史書、日記、伝承などにも様々な形で名をとどめていることに、時として瞠目するのだ。それゆえ、地名自体が、地域の歴史、伝統、文化を継承する無形の財産と言えるのかもしれない。明治の大合併の際には、それまで大きかった町村の名を新名称として引き継ぐとともに、旧名を大字とし、住居表示の一部とした。それを閑却した感さえる平成の大合併。次号ではこれにもふれ、併せて資料後半を紹介したい。（次号に続く）

資料 「生徒人員町内別調査表 明治40年1月現在 土浦中学校」(行方・筑波・真壁・東茨城・西茨城などの各郡は次号に掲載) **にある町村名の変遷について**

町村名	生徒数	古代～近世	明治2年	昭和30年	平成7年
新谷郡	25				
土浦	48	土浦藩上層氏城下町・水戸街道土浦宿	土浦町(単独で) S12中家村(9大字), S13藤沢村(虫掛, S14東村(9大字), S15真壁町(3大字)合併＝土浦市	土浦市	土浦市
真鍋	17	真鍋村土浦藩領	真鍋町(真鍋・殿屋・木田余の合併) S15土浦市と合併(3大字)	土浦市(S15)	土浦市
上大津	26		上大津村(手野・白鳥・田・沖宿・菅谷・神立の合併)	土浦市(S29)	土浦市
下大津	4		下大津村(加茂・戸崎の合併)	同上	出島村(S30)
美並	4		美並村(深谷・上大堤・下大堤・三ツ木・南根本・大和田・男神・中台の合併)	中世南野莊より命名	出島村(S30)
牛渡	0	牛渡村(佐竹氏領→天領・旗本佐壽氏相給)	牛渡村(牛渡・有可《御件渡の一節》の合併)	出島村(S30)	かすみがうら市
佐賀	4	坂村(佐竹氏領→天領→幕末期＝土浦藩領)	坂村(田代・坂の合併)	佐賀＝古代の郷名	出島村(S30)
安飾	3		安飾村(安食・柏崎・岩平・輕部)の合併)	安飾＝古代・中世の郷名	出島村(S30)
志土庫	1		志土庫村(穴倉・西成井・上輕部)の合併)	志土庫＝中世の郷名	出島村(S30)
関川	7		関川村(石川・井関の合併)	石川・井関から関川	石岡市(S29)
三村	5	佐竹領→府中藩領→天領→府中藩領→天領→元禄3(府中藩・旗本小野氏・同深谷氏相給)	三村(単独で形成)	古代の上郷・中郷・下郷の合流により三村	石岡市(S29)
高賓	7	佐竹領→府中藩領→天領→旗本部川氏知行→天領→旗本沼茂氏・松平氏・小野氏・土壁氏相給)	高賓町(高兵・北根本・中津川・東田中・東大橋・小井戸の合併)	石岡町(S28) S29市制施行	石岡市
玉川	3		玉川村(下玉里・川中子の合併)	下玉里の玉・川中子の川より玉川	玉里村(S30)
田余	2	平安～戦国期の玉余郷・戦国期に玉里郷	田余村(たあまり・上玉里・高崎・栗又四ヶ・田木谷の合併)	田余＝古代の郷名	玉里村(S30)
石岡	23	古代・茨城国造・常陸国府・茨城廻府・近世=天領・松平氏領等→水戸徳川家の支藩	石岡町(石岡町・村上村・染谷村の合併) S29市制施行	石岡市	石岡市
園部	1		園部村(成井・山崎・真家・宮ヶ崎・柴間の合併)	園部川に因む村名	八郷町(S30)
瓦倉	4		瓦倉村(小嶋・宇治会・瓦谷・野田・佐久・部原の合併)	宇治会・瓦谷から瓦倉村	八郷町(S30)
林	0	古代=井南郡・中世=林郷	林村(浦須・上林・下林・嘉良寿理・片岡・根ノ屋の合併)		八郷町(S30)
恋瀬	2		恋瀬村(大塚・大曾・太田・中戸・小見の合併)	村中央を流れる恋瀬川に因んだ村名	八郷町(S30)
草穂	9		草穂村(小倉・吉生・上曾・小量・小山田・鯨崎・猪内の合併)	草穂山とも称した足尾山山麓の位置に因む	八郷町(S30)
柿岡	2	中世の郷名・近世=天領→小田原藩領→旗本稲龜氏知行→天領・旗本小堀氏相給)	柿岡村(柿岡・片野・金指の合併)		八郷町(S30)
小幡	10	小幡村(下総関宿藩領→土浦藩領→旗本板倉氏知行)	小幡村(小幡・須釜・細谷・上青柳・下青柳・加佐野の合併)		八郷町(S30)
小桜	7		小桜村(半田・川又・月岡・青田・弓弦・柴乃・辻・菅浦尺・小野越・仏生寺の合併)	村内を流れる小桜川に因む	八郷町(S30)
志筑	7	古代=前村・中世=志筑郷・幕末期=外様本堂氏知行地	志筑村(上志筑・中志筑・下志筑・横堀・大峰・五反田・高倉・栗田の合併)		千代田村(S29)
新治	4	新治村(天領→旗本小野氏・末高氏相給)	新治村(新治・上土田・下土田・東野寺・西野寺・飯田・市川の合併)		千代田村(S29)
七倉	17		七倉村(上稻吉・下稻吉・上佐谷・中佐谷・下佐谷・雪入・山本の合併)	七村合併に因む村名	千代田村(S29)
都和	19		都和村(常名・中貫・今泉・小山崎の合併)		土浦市(S23)
藤沢	5	古代=藤沢庄・中世=藤沢郷・近世=結城氏領→土浦藩領	藤沢村(藤沢・大畑・上坂田・下坂田・虫掛の合併)		新治村(S30)
斗利出	9		斗利出村(高岡・田土部・沢辺・藤沢新田の合併)	高岡にある戦国期の岩跡に因み「とりで」の村名	新治村(S30)
栄	8		栄村(上境・土器屋・横町・金田・松塚・中根・古来・大・吉瀬の合併)		桜村(S30)
九重	6		九重村(上ノ室・上広岡・下広岡・大角豆・倉掛・妻木・東岡・花室・柴崎・岡村新田の合併)		桜村(S30)
栗原	4	古代の郷名・栗原村(旗本堀氏知行→天領・堀氏相給)	栗原村(栗原・上野・蓮沼の合併)		桜村(S30)
山ノ荘	3	中世の荘園名	山ノ荘村(大志戸・小高・小野・東城寺・永井・本郷の合併)	中世の荘園に因む村名	新治村(S30)
中家	16	古代の郷名	中家村(上高津・中高津・下高津・小松・佐野子・飯田・矢作・穴塚・粕毛の合併)	古代の郷名に因む村名	土浦市(S12)
東	13		東村(中・摩利山・新田・乙戸・永野・中村・西根・右根・鳥山・小岩田・大岩田の合併)	氏神の東神社に因む村名	土浦市(S14)
稲敷郡	24				
浮島	2	奈良時代々の村名・近世=天領→旗本雨宮氏・諸子氏・小栗氏相給→天領	浮島村(単独で形成)	かつては四方が湖水に囲まれていた。	桜川村(S30)
舟島	3		舟島村(舟子・島津・竹来・掛馬の合併)	舟子=美辭村(S30), 島津・竹来・掛馬=阿見町(S30)	美辭村・阿見町
朝日	2		朝日村(福田・小池・上長・実勢・荒川沖・荒川本郷・沖新田の合併)	村内を疎通する朝日川(乙戸川)に因む村名 S23沖新田と荒川沖・荒川本郷の一部を土浦市に編入	阿見町(S30)
柴崎	1	柴崎村(陸奥仙台領→天領)	柴崎村(柴崎・中山・戊渡新田・伊佐津・伊佐津新田・角崎・狸穴の合併)		新利根村(S30)
阿見	4	古代=阿前郷・中世=安見郷・近世=安見村(旗本倉橋氏・久永氏相給→旗本羽羽氏・久永氏相給→阿氏・土浦藩相給→阿氏・土浦藩相給→阿氏・土浦藩相給)	阿見村(阿見・若栗・大室・廻戸・青宿・鈴木の合併)	S20市制施行	阿見町
木原	2	中世の郷名・近世=木原村(幕府と旗本大久保氏・一色氏・鈴木氏の相給)	木原村(木原・請領・大賀賀津・茂呂・宮地・布佐・大谷・信太・興津の合併)		美辭村(S30)
岡田	1		岡田村(東端六・東大和田・中根・下根・岡見・柏田・結束・上太田・猪子の合併)	岡見・柏田からの村名	牛久町(S29)
安中	2	中世=あんちうの地名	安中村(大山・土浦・馬見山・山田・八井田・山内・谷中・大塚・中野内・木・定光・本橋・間野・牛込・堀田・根本・根代・馬掛の合併)	全体を安中郷と称していたことに因む	美辭村(S30)
望崎	2	近世=谷田部藩領(旗本・牛久藩山口領・旗本天領)	望崎村(上岩崎・下岩崎・房乃・天室寺・小室・若栗・菅間・樋ノ沢・大井・高崎と庄兵衛新田の一部)の合併)	上・下岩崎・高崎・小室からの村名	望崎村(S30市制)
江戸崎	1	古代=前津村・横濱村・中世=江戸崎・近世=江戸崎村(佐竹氏領→天領→大名青山氏領→古渡藩領→下総関宿藩・旗本久永氏・同羽羽氏相給→関宿藩領)	江戸崎町(江戸崎・大塚の合併)	S29市制・沼里・鳩崎・高田を合併	江戸崎町



町村の規模や財力の差を感じる土浦町役場（大正期）と九重村役場（明治期、現在のつくば市）
（「写真記録茨城の20世紀」より転載）

本校の旧本館資料室には、土浦中学校当初からの様々な記録・遺産が収蔵されている。それらは、往時の学校の様子や社会の世相を読み解く貴重な資料。それが身近に存在し、直に触れられるのは、諸先輩方の努力の賜であるとともに伝統校の証でもある。紙面裏側の資料（生徒人員町村別調査表明治40年1月現在土浦中学校）もその一つ。この資料を通し、これまでの市町村合併を考えてきたが、その一区切りを打つ今号は平成の大合併を中心に述べてみたい。

明治の大合併と昭和の大合併

折々の理念が掲げられ、実施された市町村合併。明治の大合併は、近代的な地方自治行政を実現する基盤整備をめざし、併せて小学校の設置管理や戸籍の事務処理が円滑に図れるよう、戸数³⁰⁰、500戸を基準に行われた。昭和の大合併は、戦後の地方自治、特に市町村の役割を強化するとともに、中学校1校を効率的に設置運営していくために、人口^{8,000}人を基準に進められた。その結果、江戸時代には町村数が7万余もあったが、昭和40年には市町村数がその5%程の^{3,392}に激減した。

平成の大合併

明治期以来、合併を一貫して推進する国は、昭和40年に10年の時限立法として制定した「合併特例法」については、その後も延長を繰り返した。しかし合併の動きは低調で、平成7年の市町村数は^{3,190}と、30年間で²⁰²の減少にとどまった。そうした中で、地方分権をコンセプトとする「地方分権一括法」が平成11年に成立し、これに伴い、「合併特例法」も、平成7年に続き、合併促進に添う改正がさらに重ねられた。その結果、住民の直接請求により法定合併協議会の設置を要請できる制度の新設や合併特例債を中心とした財政支援措置の拡充がなされた。そればかりでなく、政令指定都市あるいは町村の市への移行の人口要件の緩和なども盛り込まれた。この強力な後押し策は、合併論議に拍車をかけることになった。

市町村側にとって、特に影響が大きかったのは、政府による合併特例債を中心とした手厚い財政支援と、同時期に進行した三位一体改革による地方交付税の大幅な削減であった。合併特例債は、合併後10年間財源として借り入れることができる地方債で、元利償還金の70%を、後年交付税により措置されるという破格に有利な条件であった。これらの特例が平成17年3月末までに合併手続きを完了した場合に限られることから、駆け込み合併

が相次ぐことになった。また、地方交付税の大幅削減は、これに対する依存度が高い小規模市町村にとっては影響が計り知れなく、財政運営への不安から合併を選択した市町村も数多くみられた。その結果、「平成の大合併」といわれた。その町村合併の動きは、平成15、17年にかけてピークを迎え、平成7年に^{3,190}も存在した市町村数は、平成23年8月1日には^{1,723}（市⁷⁸⁶、町⁷⁵³、村¹⁸⁴）に急減した。明治421年末の町村数³⁴が、123年を経て、実に2.2%にまで累減したことにほかならない。今昔の感を深くする。

一方で、「平成の大合併」の別な側面としては、原子力発電所の立地に伴う交付金、あるいは大企業の進出による税収増等により、地方交付税への依存度が低い町村は合併に手かずであったり、都市部における合併はほとんど進展しなかったりした。また、市町村の拡大で、地域差の拡大や地域密着度の低下、地縁共同体としてのコミュニティ崩壊や地域文化の喪失等を懸念する向きも指摘された。

特に、地域文化を連綿と伝え、その地に住む人々のアイデンティティとも言える市町村名が消され、集客・観光向けをねらった斬新で、「トクする名前」優先の誕生が目立った。そもそも地名は人々の営みに根ざし、それを紐解くと、熟成された歴史と文化が溢れ出すものと言える。裏面資料の立花・玉川（いずれも行方郡）も親しまれ、歴史を帯びた村名にもかかわらず、葬り去られていった状況が、今回は怒濤のように押し寄せた感すらある。

旧本館は収蔵品も貴重な文化遺産

いずれにせよ、「生徒人員町村別調査表」を凝視していると、垣間見えたり考えさせられたりすることは余りにも多い。これ以外にも、資料展示室には、明治大正期の諸資料（史料）、年度ごとの『進修』『教務日誌』『進路要覧』などが所狭しと展示されている。その一部は、これまでも小紙で幾度となく取り上げ紹介してきた。資料を介して、その時々

の教科指導内容や行事、部活動、生徒の意識や学校生活、進路先などが直に伝わってくる。併せて、当時の社会状況も透けて見えてくる。旧本館は、建物本体ばかりでなく、凡百の収蔵品も一級資料で、魅力が尽きない。それゆえ、在校生には、校長先生自らが、今年度は行っている旧本館教室における道徳授業の際にでも、逸品が陳列された各室を巡覧し、貴重な遺産の醍醐味を堪能してほしい、と思う。最後に、紙面裏面の資料を補足する意味で、「新治郡真鍋町」と「新治郡小幡村」を、中世にまで遡って紹介したい。（了）

新治郡真鍋町

【中世】真鍋 戦国期に見える地名。常陸国南野庄のうち、永禄7年に上杉謙信が関東に侵攻した際、小田氏治を攻めた時の状況を示すと思われる小田氏治味方注文に「さたけの陣所 まなへのたい、つちうらさんへん」と見え、土浦近辺の真鍋台に佐竹義昭の陣所がおかれ、土浦城に拠った小田氏治方の菅谷氏を攻めたものと思われる。

【近世】真鍋 江戸期、明治22年の村名。常陸国新治郡のうち、土浦藩領。村高は974石、1,070石（時期により変動）。家数は90（百姓57・町人18・職人10・寺5）。土浦宿の定助郷。

【近代】真鍋 明治22年、昭和15年の町名。真鍋・殿里・木田余の3カ村が合併して成立。旧村名を継承した3大字を編成。明治24年の戸数447戸・人口569人。昭和10年の戸数1,023戸・人口5,218人。昭和15年土浦町と合併。土浦市の一部となり、3大字は同市の大字として継承。

真鍋の地は、昭和56年大部分が西真鍋町・東真鍋町・真鍋1・6丁目・真鍋新町に表示変更。

新治郡小幡村

【中世】小幡 鎌倉期、戦国期に見える地名。常陸国総社宮関係文書や戦国期に小田氏と水戸城主江戸氏が戦った際の軍記や関係文書に小幡城主小幡長門守（小田氏流）の名が見える。

近世

【近世】小幡 江戸期、明治22年の村名。常陸国新治郡のうち、寛文年間には下総関宿藩領。貞享4年は土浦藩領。元禄年間と幕末期は旗本板倉氏知行。村高は元禄期で^{1,616}石、天保期で^{1,641}石・家数は90家。

【近代】小幡 明治22年、昭和29年の村名。小幡・須釜・細谷・上青柳・下青柳・加生野の6カ村が合併して成立。旧村名を継承した6大字を編成。明治24年の戸数388戸・人口533人。昭和10年の戸数641戸・人口616戸。昭和30年1月1日に他の1町6村と合併し、発足した八郷町の一部に、6大字は同町の大字に継承。平成17年10月1日、平成の大合併により、石岡市小幡となる。

資料 「生徒人員町村別調査表 明治40年1月現在 土浦中学校」(その2) (土浦などの新治郡・阿見などの稲敷郡は前号に掲載。総計は前号の生徒数も含む)にある町村名の変遷について

町村名	生徒数	古代～近世	明治22年	昭和30年	平成17年
	22				
秋津	6		秋津村(高田・串挽・野友・半原・借宿・青柳の合併)	鉾田町(S30)	鉾田市
立花	2	立花郷(平安期)・橋郷(中世)	立花村(羽生・八木蒔・沖洲・浜の合併) 古代の郷名に因む村名 立花郷の一部はM22橋村(のち小川町)	玉造町(S30)	行方市
行方	3	古代・中世=行方郷、近世=行方村、佐竹氏領→麻生藩領→天領	行方村(船子・五町田・於下・行方の合併)	麻生町(S30)	行方市
手賀	2	古代=提賀郷、中世=手賀郷、近世=手賀村、佐竹氏領→麻生藩領	手賀村(単独で形成)	玉造町(S30)	行方市
武田	1	中世=戦国期の地名	武田村(小貫・次木・両宿・内宿・長野江・成田・三和の合併)	北浦村(S30)	行方市
小高	2	古代・中世=小高郷、近世=小高村、佐竹氏領→麻生藩領	小高村(橋岡・小高・貝井・南・島並の合併) 古代小高郷に因む村名(5村とも小高郷内)	麻生町(S30)	行方市
玉川	1		玉川村(井上・出沼・藤井・荒宿の合併) 「常陸風土記による玉清井」から流れる玉川に因む村名	玉造町(S30)	行方市
玉造	4	古代=玉造部の住地、中世=玉造郷、近世=佐竹氏領→水戸藩領	玉造町(単独で形成) S30;立花・現原・手賀・玉川を合併	玉造町	行方市
現原	1	古代・中世=荒原郷	現原村(椋木・若海・芹沢・谷島の合併) 古代の郷名に因む村名	玉造町(S30)	行方市
筑波郡	29				
葛城	3		葛城村(刈間・東平塚・西平塚・下平塚・根崎・西大橋・西岡・島・山中・柳橋・平・大白碓・小臼碓・新井・原の合併) 総鎮守八坂神社の所在地である旧蒔間村葛城からの村名	谷田部町(S30)	つくば市
旭	4		旭村(要・遠東・中東原村新田・土田・高野・百家・酒丸・沼崎・今鹿嶋の合併) 日の丸の扇が9本骨であることを吉とする古例に因んだ村名 豊里町(S30)、要のみ大徳町	大徳町(S31)	つくば市
大徳	1		大徳村(大曾根・若森・佐・篠崎・前野・長高野・玉取の合併) 大曾根と古代の方籠郷に因んだ村名 S28町制、S28栗原村藩沼、S30旭村要、S31吉沼村吉沼の一部及び同村五人受・大砂・西高野を編入	大徳町(S31)	つくば市
小田	4	中世=小田氏の拠点、近世=佐竹氏領→天領→青海高島藩領→旗本横山氏知行→土浦藩領	小田村(平沢・山口・小和田・小田・北太田・大形・下大島の合併)	筑波町(S30)	つくば市
北條	4	佐竹氏領→天領→近江山路藩領→旗本堀田氏知行→土浦藩領	北条町(北条町・君島村・泉村・小泉村の合併)	筑波町(S30)	つくば市
筑波	2	古代=筑波郷、中世=筑波、近世=佐竹氏領→知足院領→護持院領→筑波神社領	筑波町(筑波・沼田・国松・上大島の合併) S30田井村・北条町・小田村・田水山村、S31作岡村、S32菅間村を合併	筑波町	つくば市
田井	2		田井村(神郡・臼井・漆所・杉木・大貫・小沢の合併) 村名は「万葉集」の高橋虫麻呂の歌に因む	筑波町(S30)	つくば市
田水山	2		田水山村(西田中・水守・山木の合併) 合併3村の頭文字を採った村名	筑波町	つくば市
島名	3	古代=嶋名郷、近世=島名村、旗本三枝氏・朝比奈氏・小笠原氏相給	島名村(島名・水堀・面野井・高田・鬼ヶ窪・中別府・上河原崎・下河原崎・下別府の合併) 古代の郷名に因んだ村名	谷田部町(S30)	つくば市
谷田部	1	古代=八部郷、中世=谷田部、近世=谷田部城下(細川忠興弟元が初代→幕末まで)	谷田部町(谷田部・上萱丸・下萱丸・飯田・中野・西栗山・片田・古館・根崎・境田・境松・羽成・東丸山・花島新田の合併)	谷田部町	つくば市
小野川	3		小野川村(赤塚・下原・新牧田・上原・稲岡・北中島・梶内・館野・松野木・小野崎・手代木・上横場・西大沼・中内・今泉・榎戸・北中妻・下横場・南中妻・市ノ台の合併) 小野川の源流からの村名	谷田部町(S30)	つくば市
真壁郡	4				
新治	1	古代=新治郷	新治村(井出蛭沢・横塚・向川澄・蓮沼・門井・久地楽・三郷・古都の合併)	協和村(S29)	S39町制施行 筑西市
椎尾	1	中世=椎尾郷、近世=椎尾村、笠間藩領のち北=下妻藩領・南=笠間藩領	紫尾村(南北椎尾村で形成)	真壁町(S29)	桜川市
大村	1	古代=大村郷	大村(松原・田宿・倉持・山王堂・中根・海老ヶ島・有田の合併) 古代の郷名に因んだ村名 S29町制施行・長讃村合併	明野町(S29)	筑西市
五所	1		五所村(森添島・子思議・五所宮・小嶋・山崎・棹ヶ島・下江連・西山田・上平塚・大谷・灰塚の合併) 五所宮の五所神社に因んだ村名	下館市(S29)	筑西市
東茨城郡	18				
小川	7	中世=小河郷、近世=佐竹氏領→松岡藩領→水戸藩領	小川町(小川・宮田・小嶋・下馬場・中延・野田の合併) S29橋・白河村を合併	小川町	小美玉市
川根	2		川根村(木部・飯沼新田・上飯沼・下飯沼・下土師・奥谷・南川又・南栗崎・野曾・駒渡・蕎麦原・越安の合併) 沼淵川左岸に位置し、俗に矢戸川根と称していたことに因んだ村名	茨城町(S30)	
鯉淵	2	中世=鯉淵郷、近世=水戸藩領	鯉淵村(鯉淵・下野新田・五平・高田の合併) 村名は鯉淵が鯉淵からの分村であったことから 友部町(S30)・内原村(S30・S40町制)	笠間市・水戸市	
竹原	4	中世=竹原郷、近世=竹原村、佐竹氏領→宍戸藩領→天領→旗本内藤氏知行→陸奥守山藩領	竹原村(竹原・竹原中郷・竹原下郷・上馬場・羽鳥・大谷・小曾内・中台・花野井・中野谷の合併)	美野里町(S31)	小美玉市
堅倉	2	中世の地名=片倉、近世=堅倉村、佐竹氏領→宍戸藩領→天領→陸奥守山藩領	堅倉村(堅倉・三箇・鶴田・柴高・小岩戸・張星・部室・西郷地・羽川新田・江戸新田・納場新田・寺崎新田・高田新田・手堤新田・大笹新田・橋場美新田・先後新田の合併)	美野里町(S31)	小美玉市
磯濱	1	磯浜村=佐竹氏領→水戸藩領	磯浜町(単独で形成)	大洗町(S29)	
西茨城郡	7				
岩間	3	古代・中世=岩間郷	岩間村(岩間上郷・岩間下郷・吉岡新田・泉・市野谷・福島新田の合併) T12町制施行 S29南川根村合併	岩間町	笠間市
西那珂	1		西那珂村(富岡・犬田・堤上・本郷・下泉・中泉・長方・鎌田・大泉・飯淵・久原・西飯岡・岩瀬・上野原地新田の合併) T14岩瀬町に S30北那珂村・東那珂村を合併	岩瀬町	桜川市
笠間	1	古代=笠間村、中世=笠間、近世=笠間城下(松平氏→牧野氏)	笠間町(笠間・下市毛・石井・日草場の合併) S30大池田村・北山内村・南山内村合併、S33稲田町編入、S33市制施行	笠間市	笠間市
北川根	1		北川根村(住吉・湯崎・随分附・柏井の合併)	友部町(S30)	笠間市
北那珂	1		北那珂村(亀岡・大月・小塩・平沢・池亀・坂本・間中・福崎・山口・入野・中里・富谷・南飯田・門毛の合併) 中世に西那珂郡と称した地の北部に当たるとに因んだ地名	岩瀬町(S30)	桜川市
結城郡	1				
豊加美	1		豊加美村(山尻・谷田部・柳原・加養・樋橋・肘谷・新堀の合併) 村名は豊田郡内最大の村で、水田は郡中の美を加えると命名された	下妻市(S29)	下妻市
鹿島郡	4				
大谷	1	古代=大屋郷	大谷村(鹿田・造谷・玉田・子生・田崎・上太田・下太田の合併)	旭村(S30)	鉾田市
巴	3		巴村(紅葉・菅野谷・大和田・上富田・下富田・鳥栖・当間の合併) 巴川左岸に位置することからの村名	鉾田町(S30)	鉾田市
那珂郡	2				
五臺	1	後台村=佐竹氏領→水戸藩領	五台村(豊喰新田・東木倉・西木倉・中台・後台の合併) 台地上の五か村と後台からの村名	那珂町(S30)	那珂市
中野	1		中野村(柳沢・部田野・中根・東石川の合併) 村名は「部田野」「中根」から	勝田町(S15)	ひたちなか市
猿島郡	1				
釈迦	1	色益郷・釈迦如来像を祀る金乗院。近世=釈迦村、天領	香取村(駒羽根・釈迦・磯部・前林・上砂井・砂井新田・水海の合併)→T5;釈迦・前林の一部を五霞村に編入	総和村(S30)	S43町制施行 古河市
水戸市	5				
県外	17				
総計	429				

A c a n t h u s

第43号

平成24年2月7日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



撮影ではドイツ大使館執務室となった旧校長室

昨年ほど本校旧本館が世間の注目を浴び、話題を呼んだ年も珍しい。NHK朝の連続ドラマ『おひさま』で、ヒロインが学ぶ女学校として、旧本館がしばしばテレビに登場したためである。県外からも見学者が相次いだり、同窓会事務局にも多くの卒業生から「毎日、楽しみに見ている」と、電話やたよりが寄せられたりした。改めてテレビ・マスメディアの影響力の大きさに驚かされた。

実は旧本館が撮影現場となったのは今回だけではない。そこで、今号も含め、本校が映画やテレビのロケ地となった際の“隠れエピソード”を拾ってみたい。

ロケ現場のタレントの素顔とは

知る人ぞ知るロケ秘話。それは、本校旧本館が10年ほど前から、映画やテレビのロケにたびたび使われ、そこで見せるタレントの素顔である。10年前と言えば、進修同窓会の旧本館活用委員会が発足し、旧本館を本格的に公開し始めた時期でもある。その頃、県では企画部地域計画課にフィルムコミッション推進室（いばらきフィルムコミッション）を立ち上げ、地方活性化政策の一環として、豊かな茨城の自然や文化を積極的に活かそうと、映画やテレビのロケ誘致に乗り出していた。もっともそれ以前から首都圏に近く、比較的自然に恵まれていた本県は、つくばみらい市の「ワープステーション江戸」がNHK大河ドラマの撮影地として聞こえ高いように、時代劇などのロケ地としてよく利用されてきた。そしてこれまでの実績をより確かなものとし、さらに強く推進すべく行政が動き出したのである。

平成15年夏、この「いばらきフィルムコミッション」を紹介し、フジテレビが、本校旧本館でのロケを打診してきた。天才女性ピアニストの半生を描いたテレビドラマ『フジ子・ヘミングの軌跡』のシーンを取りたいとのことであった。旧本館をドイツ大使館に、館内の校長室を大使の執務室に見立て、撮影が行われた。画鋲一本の傷も許されない国重文の建物に道具や小道具、撮影機材が大量に持ち込まれた。張り詰めた空気の中、最終ロケに立ち会うことを余儀なくされた私どもは、建物や備品に損傷・損壊が及ばないよう細心の注意を払い、監視役として目を光らせた。この時、大使役を演じ

ていた岡田真澄（故人）氏は撮影の合間に気さくに私どもに話しかけてきた。その全てまでは今となってはおぼろげだが、旧制中学校校舎にしては誠に華麗で立派な建物だと感心していたことと、穏やかで飾らない人柄が強く印象に残っている。

平成17年春には、やはり「いばらきフィルムコミッション」を通じて、石原プロの映画ロケの話が持ち込まれた。石原慎太郎原作『弟』の映画化ということで、大型コンテナトラック数台に積んだ膨大な機材と、バスなどに分乗した大勢のスタッフを送り込まれてきた。それは予想を遙かに凌駕し、度肝を抜かれた。そして旧本館の復元教室が慎太郎の弟裕次郎の高校時代の教室として使用されたのだ。



大量の機材を持ち込む石原軍団のロケ隊

いつもそうであるが、ロケ実施については、本校の生徒には知らせていないし、ロケそのものは夏休みや休日などに進められるので、撮影の際のヤジウマは多くない。だが、今回は主役を演じるのがジ

ヤニーズの超人気スター長瀬智也ということもあって、どこで知ったのか、かなりの見物人が集まってきた。その方にも神経を使いながら、撮影現場には十分に目をこらしていなければならぬ。現場は照明や各種調整機器が所狭しと置かれ、そこを大勢のスタッフが動き回っている。撮影の邪魔になってはいけないし、かといって現場から離れていては立ち会いの役目を果たせない。私どもはその位置取りにも、千思万考、苦心惨憺するのである。大抵の場合、私どもは本館内外を見通すことのできる玄関階段付近で全体的な動きに目配りしつつ怠りなく注視する。そうした中、撮影の合間の休憩時間に、主役の長瀬智也が玄関に出てきて、付け人にたばこの火をつけさせようとした。私はとっさに「ここでの喫煙はご遠慮ください」と告げた。片膝をついて、ライターと灰皿を手にしていた付け人は困惑の表情を見せたが、長瀬本人は大変恐縮がり、「うっかりしていました。文化財の建物の中で、たばこはいいですね」と爽やかな笑顔でたばこをポケットに収めた。「さすがだ」と思った。一流のタレントだけのことはあると得心がいった。



復元教室で『弟』ロケの授業風景
(生徒達の中に主役の長瀬智也がいる。
ただ本校生徒・関係者は誰もいない)

女学校・兵学校と七変化の「旧本館」

平成20年には、テレビ朝日ドラマスペシャル『男装の麗人〜川島芳子の生涯』という作品も本校が撮影の舞台となった。主人公芳子を通う女学校（長野県松本高女、大正10年頃）の校門シーンは、本校旧正門で撮影された。馬に乗って登校して来た芳子が、高女・正門前で次のようなやりとりをする場面である。

男の教師二人、門の前で両手を広げて立っている。その前に馬を止め、馬上から教師を見下ろしている芳子、気色ばんだ様子で芳子「いったいどういことですっ」教師1「校長先生の命令だ。馬を中に入れるわけにはいかん」

教師2「家に戻り、馬をおいてから再登校しなさい」（台本より）

今回の撮影スポットは旧本館ではなく、旧正門。このときは、文化財校舎に劣らない気品と風格を有する旧正門の存在に改めて気付かされる機会でもあった。

また、同年の夏には、東京・武蔵野の「私立女学園高等部」を舞台とした青春学園物語の人気アニメ『マリア様がみてる』が実写映画化され、国重文校舎の一番となった。本館中庭に純白のマリア像（実際は発泡スチロール製のハリボテ）が置かれ、清純な乙女たちの学園生活の様子が描き出された。女人禁制とも言える旧制中学校校舎であった旧本館は、ミステリアスでお洒落なミッシェンスクールに「変身」した。これがまた、やんわりと温かい愛につつまれた雰囲気醸し出され、マリア像とよく調和した空間をつくり出していたから不思議である。

さらに数年前には、土浦市の観光商工課にも「つちうらフィルムコミッション」

が設けられ、本校へのロケ申し入れが急増した。平成21〜23年にかけては、NHK関係のロケだけでも5件も続いた。ドラマスペシャルの『白洲次郎』、同じく『坂の上の雲』、「トライエイジ」三世代の挑戦」の『金田一家の物語』、そして連続テレビ小説『おひさま』である。

いずれも旧本館の復元教室が主に利用された。この国重文校舎は、『白洲次郎』では旧制中学校に、『坂の上の雲』では海軍兵学校に、『金田一家の物語』では帝国大学に、『おひさま』では高等女学校に、明治・大正・昭和の各時代の様々な学校に擬せられ、どれも見事な「絵」になっている。もちろん優れた映像制作技術によるものであろうが、この建物の計り知れない造形の豊かさが多様な要請にしっかりと応え得たものだと言えよう。

旧本館を見て回る売れっ子俳優

立ち合ったロケでは、万事徹底する現場の「気迫」に、いつも圧倒されていた。

『坂の上の雲』では、海軍兵学校の生徒宿舎として旧本館の第四資料展示室が充てられ、部屋一杯に簡易ベットが並べられた。そこで、入学したばかりの生徒たちが起床の合図で飛び起き、急いで制服に着替えて廊下に飛び出すシーンが撮影された。その光景を近くで見ていたが、OKが出るまで「何回」撮り直しが行われただろうか。この一場面だけでも数10分の時間を要している。それだけではない。部屋を生徒宿舎に見せかけるために、古めかしい仕様のベットのわざわざ用意し、窓にはカーテンを吊るし（文化財校舎であり、事前打ち合わせで壁などに釘一本打たないことを確認。そのため、この作

業にはかなりの工夫と時間を要した）、さらに部屋の壁際には、制帽架けを設置するなど、最高の作品づくりに八方手を尽くし、準備は優に数時間を費やした。



海軍兵学校の宿舎
(旧本館西端・第四資料展示室)

後にこのシーンをテレビで見たが、1分足らずの場面であった。僅かなワンカットに、これ程の労力や時間を惜しみなく注ぎ込む映像文化の特異性とこだわり、さらに完璧を求める情熱と努力を知った。



東京帝国大学で講義する金田一博士
(旧本館復元教室)

緊張感にあふれ、妥協を許さない創作活動は延々と続けられるのであるが、出演者にとつては自分の出番まで待つ時間が生じて来る。多くは、控室（多くの場合、進修学習館）で台本に目を通したり、仲間と談笑に興じたりしている。また時には旧本館周辺を散策する者もいる。

そうした中であって、『金田一家の物語』のロケの時、学生役で出番を待っていた若者の一人はデジカメを手に、しきりに旧本館のあちこちを見て回っている。この建物にかなりの興味を示している様子なので、声をかけてみた。古い建造物が大好きだというので、簡単な説明をしながら館内を案内した。人懐こい笑顔で話しかけてくる好青年であった。自然に会話が弾んだ。これまでもテレビドラマなどに出演しているが、いずれも端役でまだまだ役者としては半人前であるとのことや、最近ではNHK大河ドラマ『竜馬伝』にも出させてもらったことなどを話してくれた。改めて名前を伺うと「駿河太郎」と名乗ってくれた。そして一通り終わると、差し上げた「旧本館パンフレット」を大事そうに鞆に納めて、撮影現場に戻って行った。彼の後ろ姿を見送りながら「駿河太郎」という名前を覚えておこうと思った。後で知ったことであるが、彼は、落語家笑福亭鶴瓶の長男で、今売り出し中の俳優なのだ。そう言えば、現在NHKで放映中の『カーネーション』にも出演していたという。（次号に続く）

故岡田真澄氏
(左)と、全口飯
に立ち会った
村旧本館活用委
員(元教諭)
(平成15年8月)



A c a n t h u s

第44号

平成24年3月1日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



女学校「卒業式」に見立てた撮影現場 ←

昨年『おひさま』で“旧本館”がテレビ画面に映し出されると、その反響は物凄かった。全国に散在する同窓生からは、「胸がぎゅーん」「びっくり&嬉しい」「懐かしい」「とても感動!」「感慨深いものが…」「青春の甘酸っぱい思い出一杯…」といった沸き立つ言葉が並べられた。一般の方々からは、「こんな校舎が残っているなんて羨ましい」「素敵な建物!」「父の誇りだもん」などの賞する声が満ちあふれた。その『おひさま』にまつわる話題を特集した今号は、本小紙「Acanthus」が発刊されて丸4年の記念となる。感慨一入であり、今春の卒業生にもぜひ届けたい。

ロケとセットの使い分け

連続テレビ小説は他のドラマとは全く違う性質を持っている。単発的な一回限りの放映に比して、短時間ではあるが、毎朝映るのである。昼にも再放送される。NHKで大河ドラマとこの連続テレビ小説は特別なものであるらしい。その制作にかける意気込みも凄いのがある。

平成23年度前期の連続テレビ小説『おひさま』は、長野県の安曇野と松本を舞台に、戦前から戦後にかけての激動の昭和の時代を、明るく爽やかに駆け抜けた一人の女性の物語であるが、そのヒロイン須藤陽子が青春時代を過ごす「安曇野高等女学校」として本校旧本館がロケ地となったのである。撮影は平成23年1月に行われたが、これに先立ち、前年の秋から演出・美術・撮影・照明・音声など各担当者からなる大人数の下見隊が複数回訪れ、入念な事前調査をしていた。特に主要な場面になる復元教室では、壁面や床、それに柱や窓枠などの寸法や色などを詳細に計測していた。そこまでやるのかと怪訝に思い聞いてみると、この教室でのシーンはドラマの中で度々使われる。その都度土浦までロケに来るのは困難なので、東京・渋谷の放送センタースタジオ内に旧本館教室のセットを組み立てたのである。教室の壁に紙一枚貼り付けることも出来ない。女学校の教室らしい雰囲気を作成するにはこうした制約があったこともセットを設ける要因の一つであった。

昨年4月から5月にかけて放映されたこのドラマで、本校旧本館教室がしばしば映し出されていたが、時折、上げ下げ式の窓が観音開きの窓になっていた教室

の映像に、旧本館で学んだことのある卒業生などには若干の違和感を覚えた方も居られたかと思うが、これはセットだった



放送センターに組まれたセットの教室での授業風景(壁には時計・額が、窓は観音開きになっている)
(テレビ画面より)

旧本館復元教室での体育(武道・薙刀の稽古)の授業風景(復元教室は机椅子が撤去され、武道場となった)
(テレビ画面より)



たのである。勿論、本物の教室での撮影も数多く行われた。女学生たちが鉢巻をし、気合いを入れて薙刀を振るうシーンは何回も繰り返し撮られていた。机を撤去した復元教室である。天井の高い部屋であったとしても長い薙刀を振り回しての演技である。狭い教室という空間と演技者の動きを十分計算し、綿密な打ち合

わせを経ての撮影なのだが、電灯や壁などに当たりやしないかと肝を冷やしながら見ていたものである。

卒業生も騙された?

映画やテレビドラマなどは、こうした幾つものロケ地を巡って撮り集めた映像を繋ぎ合わせて一つの作品に作り上げていくのである。従って、出来上がった作品での場面は、必ずしもロケ現場の情景とは異なっていることがよくある。例えば『坂の上の雲』で、旧本館復元教室が海軍兵学校の教室として撮影されたが、放映されたドラマでは、まず重厚な煉瓦造りの旧海軍兵学校校舎が映り、場面が一転してその内部の教室の授業風景になる。視聴者は直前の校舎全景の残像効果もあって、この教室を疑いなく兵学校の一部として自然に受け入れてしまう。ロケに立ち会った私もですら本校復元教室の映像を危うく見逃すところであった。

ドラマ『坂の上の雲』で
兵学校の教室となった復元教室



『おひさま』では次のような笑い話も生れた。栃木県の知人からの電話で、毎朝、連ドラ『おひさま』をみている。陽子の通っている女学校になっている土浦一高の旧本館は素敵な建物だ。それに陽

子たちが登下校する学校近くの古い街並も素晴らしい。一度訪れてみたいというのである。女学校場面は紛れもなく本校旧本館であるが、女学生達が下校時に立ち寄る駄菓子屋のある通りは、長野県の奈良井宿なのである。テレビでは、陽子の住む田園地帯の安曇野から学校近くの町並みを通り、女学校へ自転車で通学する様子が滑らかな映像の流れで表現されている。素直に見れば学校は、昭和初期の雰囲気を残す古い街並の一角にあると思える。実際、ドラマはそのような設定で制作しているのだ。



陽子たちが登下校時を通る学校近くの町並み
(この町に水飴の美味しい駄菓子屋もある)
(テレビ画面より)

また、ある旧制中学時代の卒業生は、「安曇野の女学校が自分たちが学んだ土中の校舎とそっくりなのに驚いた。日本にはまだ一高旧本館のような建物が結構残っているんだな」と全く土中校舎であることに気づかずドラマを視ていたそうである。同じようなことを話してくれたのが、昨秋の本校文化講演会で講演をさ

れた長有紀枝(高34回)さんである。講演会の後、駆けつけた友人たちと思い出深い教室のある旧本館に赴いた際、『おひさま』の話題になった。「えっ?、あの女学校は一高の校舎だったの。毎朝視ていたけど、ちっとも気付かなかった。そうだったの」と残念そうに話す彼女に、友人たちは「ドラマのタイトル画面に、撮影協力として一高の名前がちゃんと出ていたじゃない」「そう、ほんの一瞬なんだけど、茨城県立土浦第一高等学校とフルネームで書かれていたわ」と彼女たちのお喋りはしばらく続くのだが、毎日忙しく多方面にわたりグローバルな活動をしている長さんにしてみれば、朝の連続テレビ小説は、ぎつしりとスケジュールの詰まった一日が始まる前の、心休まるひと時を満たす軽い絵巻物でしかなく、画面に時折、母校の一部が映ったとしてもそれに気付かないほどの気楽さでテレビと付き合っていたのであろう。

テレビドラマのロケ地

それにドラマを制作するテレビ局側は、ロケ地などの情報提供にはあまり熱心では無いように思われる。昨年、『おひさま』の本校でのロケが終りかけた折、制作責任者が私のところにやって来て「素晴らしい建物でのロケをさせてもらい、ありがとうございます。お蔭様でいい作品ができそうです。それにしても大変申し上げにくいのですが、局の規定で、こうしたロケなどの撮影協力については、放映の際のタイトル画面に市町村名までしか表示できないのです。御校名が出せないのは私も残念なのですが」と云うのである。私もそういう決まりがあるのでは仕方がないと思いつつも、「何と

か学校名だけでも出して貰えればうれしいのだが」と駄目押しを試みた。「上に相談してみます」との担当者の返答を、この件についての締め括りの言葉として受け止めた。

昨年4月から連続テレビ小説『おひさま』は放映された。本校旧本館をはじめ回を重ねる毎に多くの撮影地が画面を賑わした。ヒロインの陽子が少女時代を過ごした美しい田園風景は、安曇野そのものである。よく出てくる水車やわさび田も、自転車で女学校に通う途中の蕎麦畑も、家族で出かけた清流も、すべて当地安曇野市で撮影されたものである。陽子の兄春樹が学んでいた松本高校も、現在松本市の「あがたの森公園」にある旧制松本高校校舎の本物を使った。しかし、親友の相馬真知子の住む家(豪邸)は鎌倉市にある「旧華頂宮邸」で、女学校近くの昭和初期の町並みは長野県塩尻市の「奈良井宿」で、戦時中、女学生たちが勤労奉仕に行った農家は茨城県常総市の「坂野家住宅」で、陽子が教師となつて勤務した有明山尋常小学校は茨城県大子町の「旧上岡小学校」(現在は廃校)で、それぞれロケされたものである。

こうした多くのロケ地を背景にした各映像の断片を継ぎ合わせ、融合集積されたものが、澁みなく展開されるドラマとなるのである。

しかし、撮影協力地として字幕に紹介されるのは、神奈川県鎌倉市とか茨城県大子町などと市町村名までで、実際どこで撮影されたかは殆ど分からない。

テレビドラマ本来からすれば、ロケ地などの具体的情報は不要なのかも知れない。いやむしろロケ地現場に思わぬ迷惑

を掛けまいとする制作者側の配慮からかとも思える。

このような背後事情があったにもかかわらず『おひさま』のタイトル画面に「茨城県土浦市」ではなく、本校名が堂々と表示された。殆ど期待していなかっただけに驚きもした。制作責任者とはこれまでに幾つかの仕事でお付き合いがあったとは言え、「上に相談」という約束をかくも誠実に果たしてくれるとは思ひもしなかった。

巨大な組織の規定を変えるには並々ならぬ困難があったに違いない。そんな中、自分の言葉に責任を持って奔走してくれた彼の誠意と行動力に心から敬意を表したい。

本校にとって校名まで出たということは勿論大きな意義と効果があった。

だが、私にとっては、彼のような現場で黙々と作品作りに情熱を燃やし、人間関係を大切にし、言葉の重みを知っている人に出会った幸運が、『おひさま』からのプレゼントであつたと思っている。

ついにながら、『おひさま』で一躍有名になった大子町の旧上岡小学校は、7月から訪れる人が急増したそうである。

本校でも来館者は確実に増えた。中には長野県安曇野市から、わざわざ旧本館を見に来てくれた人もいた。

『おひさま』のタイトル画面 (テレビ画面より)

